

新訂 ロバート・オウエン著作史
豫備的考察

—ロバート・オウエン文献学的研究論考（I）—

五 島 茂

[目 次]

はじめに	3
PART I	5
PART II	15
Ch. I. Vision 第一	17
New Lanark	
A New View of Society, 1813-14	32
Ch. II. Vision 第二	41
Plan-Community-Co-operation	
Report to the County of Lanark, 1820	46
An Explanation of the Cause of the Distress, 1821	53
The Social System, 1821 [1826-27]	58
一つのとじめに	61

新訂 ロバート・オウエン著作史
豫備的考察

——ロバート・オウエン文献学的研究論考（I）——

五 島 茂

1994

はじめに

1968-69年 Hawaii 大学大学院出講の帰路、米本土にわたり、Owen 協同体実験の故地 New Harmony を訪れた後、New York 国連本部の川のほとりの豪華なフラットで、New Harmony の真の経営者で Texas の石油財閥のひとり Owen 家一族のひとりケネス・オウエン夫人 (Mrs. Kenneth Owen) を中心とするこの持主の催したきらびやかなパーティに招かれ、Owen の血を承けた直系の若い人びととあかるい何ともいえずあたたかな愛に充ちた瞳を受けながら、ひとりの若い美しい女性からは私の『ロバート・オウエン著作史』の英訳をすすめられたりしながら、ウイスキー・サーバーのカップをあげては、しみじみと Owen Family のなかにいるおもいに心ゆれ、私をつつむ Owen の巨きさに目をほそめて引込まれるようであった。生誕 200 年に日本代表として渡英、ロンドン、ニウタウンのフェスティバルに出席した時もいろいろのおもいを新たに。そのあとに書いた私の『ロバート・オウエン』伝の一節を引用しよう。

「研究面の進歩こそ、200 年祭最大の成果とおもわれる。……しかし、この顕著な成果蓄積の上に立ってすら一むしろその上に立てば立つほど Robert Owen の巨像がいよいよ謎の微笑をたたえてわれわれの前に立つのをおぼえる。しかも J. L. ハルステッドが『労働史研究協会紀要』(23 号, 1971 年秋) で、これらの研究成果を、「パラドックス・オウエン。パラドックスは解決されたか？」として論じた如く、Owen のすがたはなお未開拓の内部を複雑にのこしており、その故に Owen の paradox は依然たる魅力をもて迫る。「Owen 主義諸施設は失敗し、彼の社会主義の見解は彼の死よりも前にすでに流行おくれであった。それなのに、彼はなぜ依然としてイギリス社会主義伝統における一中心人物なのか？ エンゲルスは、Owen の社会主義を Utopian と非難しえたが、しかも労働者のためのイギリスの一切の社会運動、一切の実質的進歩は、それ自身 Robert Owen の名と結びつくと認めざるをえなかったのはどうしてなのか？ 「イギリス社会主義の父」が労働者階級の地位向上を求める労働者ではなく、紳士的に philanthropist になった self-made の産業資本家であった環境は何なのか？ 彼の同時代人をそれほどひきつけた Owen の謎 (enigma) —— 魅力は、つづく何世代もの社会改革者たちの心を魅了した。彼の業績と思想はおどろくほど現代的だ。彼は現代への教訓や message をもつ。イギリス社会主義伝統の多くの部分は、事実、この過去の謎的人物の一連の再解釈である。「どの時代にも “Mr. Owen” の新見解がある。」(J. F. C. Harrison. 1971 年記念論文) (中略) Owen は paradox 的人間のゆえにわれわれを引きつける。Owen の思想の核は協同主義、それもきわめて含蓄に富んだものだ。ひろく多く多響的 (polyphony) と私はおもう。

協同組合、労働組合、労働交換所、工場厚生福利施設、工場立法、世界最初の幼稚園 (Pestalozzi より早い)、労働者新教育、性格形成論、環境社会学、新結婚観、既成宗教の否定、都市と農村の結合、協同社会、夏時間 (summer time)、Green-belt 等々、今なお世界的関心をひき、多くはわれわ

れの生活に入り込んでしまっただ疑問にも思わないこれらの idea は、みな Owen という泉に回帰する。これをたった一人の人間が考え出し、行なったのだ。Paradox も謎も生まれよう。87歳の最後の最後まで精力的に humanity の思想と民衆のためにはたらいた驚くべき大人物——これが Robert Owen その人なのだ。だから仕事よりも思想よりも人間 Owen の生涯にひきつけられる。生涯のなかにこそ Owen・paradox をひらく鍵があるにちがいない。」(拙著『ロバート・オウエン』家の光協会刊)

その Owen の生涯を私は『著作史』という鏡で照らし出してみたいのである。

PART I

Robert Owen (1771-1858) は近代社会主義の創始者の一人、協同主義・協同組合運動の思想的源流といわれる。このオウエンの極めて多彩な諸活動に対して 'Owenism' という言葉が、オウエン自身が嫌っていたにもかかわらず当時からひろく流布していた。が、1971年オウエン生誕200年を中心に「オウエン学」(Owenology) という言葉が云々されるようになった。もちろんまだ学的内包も確定に至ってはいない。オウエンは、人間、理論、実践とも、単純で一本調子のように見えながら、それ自身として前進・変転・後退・矛盾を重ね、いわば "Owen, the paradox" の面目を躍如としており、しかも行動があまりにも '多目的' 'multipurpose' なために、すっかりした体系化にはまだまだ多くの困難がまつわる。彼はイギリス産業革命期の象徴的一存在ではあるが、その時代からも特立しているところがあり、その故に時代をすどく視、その病弊を告発しえたともいえる。と共にオウエン「万華鏡」はしばしばくもった曖昧さをぬぐいえない。たとえば彼の思想の背梁を "Co-operation" とみて、協同社会主義 (Co-operative Socialism) という。ところがオウエンの思想以上にこの "Co-operation" あるいは "Co-operate" という文字そのものの内包するものがまことにルースであり、またあった。一方からいえば、このルースさのゆえに概念に柔軟なはずみを持つともいえる。それが却ってそのときの時代感情、そのときの労働大衆の情動に強くアピールして彼らを運動に駆ったともいえるのであろう。

思想家の研究は一般に生活史、著作史、批判史の三部から成る。私の Owenology 研究も本来この三局面の合成である。私はオウエンの『自叙伝』(The life of Robert Owen. Written by himself, 1857) の邦訳から研究に入った(はじめ本位田祥男博士との共訳 [日本評論社 1928 刊]。戦後岩波書店のすすめで五島茂ひとりの改訳を刊行した。五島茂訳『オウエン自叙伝』[岩波文庫 179. 1961 刊]。また『ロバート・オウエン』も 1934 年(三省堂刊)と 1973 年(家の光協会刊)と二冊出版した。批判史も単行書こそないが、相当多数の関係論文を發表して来ている。しかし私の Owenology のライフワークがすすむにつれて「生活史・批判史」の三局面も結局基礎作業としての「著作史」的解明とその補訂に集約特立され、その含蓄のゆたかさにしぼられると考えざるをえなくなったのである。

私が『著作史』として公刊したものは、次の二巻本一

1] 『ロバート・オウエン著作史—協同の一研究』(ROBERT OWEN, 1771-1858: A New Bibliographical Study. Vol. 1, 1932. 大阪商科大学研究叢書第 1 冊。大阪商科大学経済研究会刊。ぐろりあ・そさえて発売。)

543 頁+18+71。(序文)「1931 年 9 月 10 日大英博物館読書室」。(補遺) 総頁 71ps. の「British Museum 所蔵の Robert Owen 著作について」(補遺のみの序, 1931 年 7 月 24 日付)

2] 『ロバート・オウエン著作史 第 2 巻。続篇。英国における著作を中心として。』(Vol. II. A

Supplement to Volume One with Special Reference to the Various Robert Owen Collections in England, Wales and Scotland. 1934年5月刊。大阪商科大学研究叢書第3冊。大阪商科大学経済研究会刊。丸善株式会社発売)。X+220頁+18。

これが英米において紹介記載評価されているものである。(Bestor 教授, J. F. C. Harrison 教授, Claeys 教授など。)

この『著作史』の2巻合巻のリプリント版が日本で再刊された。これには私の論文抜刷 ‘Social System 考’ (1936年7月執筆, 1971年3月補正)を別刷添付。東京オリエンタル・ブックセラーズから1973年公刊された。

私の『著作史』が現在もなお生きている原因の最大の一つは、私が拙著『オウエン著作史』で、70年前に初録入れをしたこの仕事の内容そのものが、その後の風雪を経た今においてさえ、オウエン研究の隆昌の外貌にもかかわらず、この地味な通底をめざす著作史的文献討究が日本ではもちろん世界的にみても依然すこしも行われず、基本的には他の方々によっては、未墾未拓のまま一步も抜け出てられない現実という驚くほかはない状況のためである。たとえば、ここ数十年におけるオウエン研究のなかでも白眉とわれわれも敬重している John F. C. Harrison 教授の “Quest for the New Moral World. Robert Owen & the Owenites in Britain and America, NY., 1969” (これは私への同教授贈呈本のタイトル[30 December 69の署名入り]。ただしロンドン版の書名は “Robert Owen & the Owenites in Britain and America. Quest for the New Moral World.” であるが、内容は同一である。)の巻末に収められたすぐれた網羅的な pp.261-369 にわたる ‘A Bibliography of Robert Owen and Owenite Movement in Britain and America’のうち、Robert Owen 自身の ‘Writings of Robert Owen’ にしても、オウエン自身の著作145種、ほかにそれぞれの諸版85種のほり、よく蒐められているが、これだけの資料を以てしても、何とも残念でならないのは諸論著作の配列が機械的に alphabet 配列に了っている点である。もしこれらの論著がもう一步検討をふみこんで公表順の配列に進んでいたならばとおもわずにはいられないのは私ひとりであろうか。また、最も新しい1993年11月一括刊行の Gregory Claeys 教授編集の William Pickering 版4巻本の “Selected Works of Robert Owen.” Vol. 1, lxiii-lxx の “Bibliography of the Writings of Robert Owen” (「単に periodicals に published or reprinted の works はここには含まれない。」と註記してある)は、167種をあげているが、これもまた alphabet 順羅列にすぎない。残念である。私が普通の書誌にあきたらず『オウエン著作史』という新しいメカニズムを考えた直接の動機となったのは、あのオウエン・コレクションで世界でも有名な National Library of Wales の『ロバート・オウエン書誌』(‘A Bibliography of Robert Owen, The Socialist. 1771-1858. 1925年改訂再版)への不満であった。私が1931年夏一ヶ月オウエンの故郷で墓のある Wales の Newtown に滞在した時、Aberystwyth の N.L. W. の書庫を訪れ、この書誌再版の実際の編集担当者 William Williams 自身と親しく会談した時、たまたま私がその書誌に洩れていた一冊を指摘したとき、それ

がどこにあるかと吃驚され、Newtown の Robert Owen Memorial Museum の書庫で私自身手にとって見ていることをお話したときの彼の印象を忘れえない。

ただ、筆者のこの『オウエン著作史』の正編続篇2冊の作成はあくまでも1920年代末から1934年までのあいだの作業だという時間的制約と、検索地域も日本とイギリスに局限され、その時はまだ米国に及ばなかったこと、またその後の第2次世界大戦による異常な文献破壊・損亡が日本にも世界にも深刻な被害をもたらした、日本でも未だにその痕跡を解明しえていない現実を残念ながら記しとどめておかねばならない。

戦後私は幸いにして1968-69の1学期間 Hawaii 大学アジア太平洋語学科の大学院の research seminar の professor として招かれ出講する機会を与えられた。帰途米本土を訪れて、オウエンの故地 New Harmony 協同体のあとや、特にすばらしい Washington D.C. の Library of Congress, また Yale 大学や Bloomington の Indiana 大学、更に英国をまわり大英博物館を再訪し、オウエン文献の原本にまたふれえた。さらに1971年 Robert Owen 生誕200年祭には日本代表として出席したとき、ロンドン、Newtown を訪れた。British Museum 三訪、London 大学 Goldsmiths' Library 再訪、Cambridge University Library と Oxford Nuffield College の G.D.H. Cole Collection を検索し探訪。短時日ではあったが、ひさびさにオウエンのオリジナルな資料を各地で手にして実にたのしかった。これらによって私の『著作史』の新訂の手がかりに入り、特にその帰朝後は日本においても一橋大学社会科学古典資料センター、大阪大学附属図書館最近年購入の Robert Owen Collection に接することが出来、さらに全国大学図書館のオウエン原本所蔵状況調査を永井義雄教授のご協力によって逐次すすめて来たこと至福といわざるをえない。

2

さて私のいう『著作史』とは何か。それは単なるロバート・オウエン書誌 (bibliography) ではない。オウエンの文献的遺産——オウエンの全文献、いかえれば、彼の単行本 (Tracts も含む) はもちろん、定期刊行物所掲の大小さまざまな論文または講演筆記、書簡形態をとるエッセイ風のものなど一切を含む。しかもそれら全文献の巨細な叙述を一つの立場から試みる。いわば the stream of labour movement の文献的成果の表現の系列と見る立場だ。すなわちそれらの文献的遺産が、それを基本的に規定した当時の生産的・社会的・経済的諸条件との複雑きわまりない生きた関連からどこまでも具体的に分析してゆこうとする立場だ。一文献の研究において、文献自体の諸多の書誌学的検討・校合・解明はもちろんだが、その背景にある主観的客観的諸条件もひろく展望させ、それとその文献との関係を闡明することも不可欠とする立場である。それ故その文献的遺産をつらぬく Owen の思想体系の形成や流れは、若干の相対的独立性を認めつつ、イギリス労働者階級の発生史・生長史・その解放運動史の一齣として把握され得ると見るのである。

文献認識にその社会の現実状勢との関連を強調する立場からして私は『著作史』なる特異な体系を定立し、従来の書誌概念——書物の批判を bibliographer の任務逸脱として排し、内容の説明を加えるか否かすら疑問視するいままでの書誌・書誌学の概念——たとえば Arundell Esdaile や R. B. McKerrow の主張を見よ——への新しい問題提出たらんと欲したのである。

著作史体系形成の基礎作業として私が第一に微力を尽くしたのはもちろん全文献の蒐集である。その場合原本主義 (original text) の徹底化をはかったことはいうまでもない。近年 Owen 関係でも reprint 版がいろいろと極めて多く公刊された。時になかなか便利であるが、まだ複写技術そのものが充分とはいかないのか、問題が多く、使ってみて、原本にふれてきた者として失望させられる場合が多いのも事実だ。

第二にかくて集められた各文献の発表・出版年月究明にうつる。邦書とちがい、「奥付」というものがないので簡単には決められぬこというまでもない。諸本そのものは勿論、当時の新聞や週刊誌や週刊運動誌などの定期刊行物所掲の記事・広告・book reviews 等々を広汎に渉猟し、考証判定を仔細に行った。これは欧米のオウエン研究者がいぶかしくも未拓の沃野であるが、この究明こそオウエンの文献遺産がはじめて真の発表順にならぶ可能性に立つ訳で、全体系の礎石がこれによって確立するのだ。

これらの基礎作業の上に私のオウエン著作史のメカニズムの全構築が組み立てられる。

- 1] 発表順に列べられた文献の全部に「通し番号」をつける。
- 2] 私の『著作史』Vol. I.「補遺」およびそれ以後に発見したものは「通し番号」は、そのまま持続しながら、「追」として然るべき箇所に挿入し、「通し番号」はそのままで、増加しない。これはもちろん将来全面改編のとき整序し、改めて新しい「通し番号」を設定する見込からなのだ。
- 3] 全文献はオウエンの場合次の段階分けをする。

オウエンは visionary といわれる。しかしオウエンの場合 visionary を形容詞として使うことには私は平静ではいられない。私にいわせれば、オウエンのいのちは vision。vision はオウエンのいのちなのだ。オウエンの場合 vision はつねに先見性と alternative 性を兼ねそなえている。それによって

- vision 第一 New Lanark. A New View of Society. (1771-1816)
- vision 第二 “Plan”-Community-Co-operation. Report to the County of Lanark. (1817-1824)
- vision 第三 New Harmony の時期 (1825-1828)
- vision 第四 無産階級 Owenism (1829-Sept., 1834). Crisis.
- vision 第五 Owenism の方向転換 (Oct., 1834-1847). The Book of the New Moral World.

• vision 第六 Universal Revolution (1848-1849)

• vision 第七 晩年 (1850-1858).『自叙伝』

という風に時期分けにすることが一応できるのではなかろうか。時期わけはいろいろの説が可能で、実存する。私も本『著作史』(『著作史』第1巻第2巻とも)の時代の区分は本稿のとはちがう時期分けをしている。

4] 各期はおのおのそのはじめに「概説」をかかげる。その期全体の見とおしと、総括的な・時には立入った詳細な批判のためである。

5] 各期の内部は各「年次」に分けられ、その年次における「一般」の社会経済情勢と「Owen & Owenism」の動きを摘記する。これらによって各文献の時代的背景を手短かに示すためである。

6] すすんで一文献の論述は、原則として次の構成をとる。

「著作番号」(通し番号)を付した「略書名」のもとに、

(1) 「内容」(その文献の内容の簡述。)

(2) 「モーティーフ」(発表・出版の直接・間接の動機・殊に当時の客観的諸条件を顧みながら。)

(3) 「批判」もしくは「影響」(その発表によって生じた社会的諸効果とその文献に対する批判。)

(4) 「Bibliographical Description」

諸本校合 (Collation)

(イ) 'Title' (Title page を記述する。)

(ロ) 'Collation' (本の大きさ [cm. で示す。]; 頁数; 各頁の説明。)

(5) この文献の所在。本邦・英国・米国において該文献を所蔵する図書館もしくは個人コレクションの名を別記する。但しこの場合英米では五島自身が直接手にふれたものに限っているのはいうまでもない。従って米国の場合は訪問検索の対象がきわめて限られ Harvard 大学その他著名なコレクションには及びえなかったことまことに申訳ない。現在の93歳の私としては海外の Owen 原本を直接手にふれての検索は無理であるが、この際も National Union Catalogue の如き、所蔵目録や辞書等を持ち出すことを敢えて避け、不完全さに甘んじたことは申訳ないが事実である。

(6) ▲印を付したのは日本にないもの、この分のみは細述した。(Another copy)とあるのは同一の版本が今一冊あることを意味する。『著作史』才一巻「補遺」の小凡例を参照されたい。

論述は、大体そのいろいろの意味での価値によって精粗をつけた。ことに本論考においては五島の『著作史』正統の場合とも異なり、執筆の便宜上各期に主要な一冊をひき出してそれをつぶさに扱う方式をとった。おゆるしいだきたい。

(7) 最後に title index をつけるのが『著作史』のとじめであるが、本論考は性質上省かれている。

以上のほか『著作史』としては書誌的处理として記載の罫線その他煩雑なまでの表式があるが、本論考ではそれを敢えてしていない。それらはいずれも私の『著作史』正統二巻の「凡例」と「注意」を参照されたい。『著作史』では各著作のあたまにいろいろのしるしをつけているが、それもここでは原則として省いた。将来の全面新訂の際にこれらはすべてゆずり、本論考はあくまでもその予備的スキツェの気持を通したと見ていただきたい。

上記(5)の文献の所在にかんれんして

私がいままで検索した大学図書館・個人コレクションは下記の如くである。

I) 『著作史』オ一巻本文所掲分。

[A] 日本。

- 1) 堀経夫博士蔵書。(仙台。のちに大阪に移られ、大阪兵庫に分散。更に逝去後はもっと諸大学に分散移動している。)
- 2) 東北帝国大学図書館。(東北大学)
- 3) 星島茂教授蔵書。(東京。但し逝去後はあの膨大な貴重な蒐集が売りに出されて分散。一部は一橋大学社会科学古典資料センターへ。)
- 4) 大原社会問題研究所。(当時大阪。のち法政大学傘下に入り東京へ移る。現在も然り。)
- 5) 関西学院大学柴田文庫。(神戸。目録あり。)
- 6) 京都帝国大学図書館。(京都大学)
- 7) 東京帝国大学経済学部図書館。(東京大学)
- 8) 東京商科大学図書館。(一橋大学)
- 9) 神戸商科大学図書館。(神戸大学)
- 10) 慶應義塾大学図書館。(東京)
- 11) 早稲田大学図書館。(東京)
- 12) 大阪商科大学図書館。(大阪市立大学)

II) 『著作史』新訂 所掲分(1993年現在)。

- 1) 一橋大学図書館および社会科学古典資料センター。(東京)
- 2) 大阪大学附属図書館オウエン関係貴重図書。(大阪、豊中)
- 3) 九州大学図書館。(福岡)
- 4) 日本大学図書館。(東京)
- 5) 専修大学図書館。(東京)
- 6) 立教大学図書館。(東京)
- 7) 東京経済大学図書館。(東京)
- 8) 放送大学附属図書館。(千葉)

Ⅲ) 『著作史』第一巻「補遺」所掲分。

[A] 英国。

British Museum Library. [B.M.] (現在の The British Library. 以下同じ)

Ⅳ) 『著作史』第二巻〔続篇〕所掲分。

[A] 英国。

[a] London:

- 1) British Museum, Manuscript Department. [B.M.MSS.]
- 2) British Museum Library, Bloomsbury [B.M.]
- 3) British Museum, Newspaper Student Room at Bloomsbury. 後に
British Museum Newspaper Library at Colindale, Hendon. [B.M. H.]
- 4) Goldsmiths' Company's Library of Economic Literature, University of London.
[G. S. L.]

[注] G. S. L. の本はすべて美麗に製本装釘され、見ひらきのところに、University of London. Presented by the Worshipful Company of Goldsmiths./1903 とある紙を貼付。Prof. Foxwell の書込み多し。近年目録が出版されたが、私はその中に自分の親しく同所で検索した分に対し若干の誤を発見した。

- 5) British Library of Political and Economic Science, London School of Economics.
[L. S. E.]

[b] Wales:

- 1) Robert Owen Memorial Museum, Newtown, Montgomeryshire. [R. O. M. M.]
- 2) National Library of Wales. Aberystwyth. [N. L. W.]
- 3) Powysland Museum. Welshpool, Wales. [W. M.]

[c] Scotland:

- 1) National Library of Scotland, Edinburgh. [N. L. S.]
- 2) University Library, Edinburgh. [E. U.]
- 3) University Library, Glasgow [G. U.]
- 4) New Lanark Cotton Mill, New Lanark, Lanarkshire. [La.]

[d] Manchester:

- 1) The Co-operative Union Ltd., Manchester. [Co-op.]

V) 『著作史』新訂所掲分(1969年2月現在)。

[B] 米国。

- 1) Lyly Library. University of Indiana, Bloomington.
- 2) Yale University Library.
- 3) Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University.

- 4) Library & Museum of Workingman's Institute, New Harmony, Indiana.
- 5) Library of Congress. Washington, D.C.
- 6) National Union Catalogue. (Library of Congress に備付けてあり, 私も検索したが, 米国主要ライブラリー記載カードを収録。) (ただしこのカタログは現在一橋大学附属図書館
その他主要大学図書館にも所蔵されている。)

VI) 『著作史』新訂所掲分(1971年5月現在)。

[A] 英国。

- 1) University Library, Cambridge.
- 2) G. D. H. Cole Collection, Nuffield College Library, Oxford.

以上のようなメカニズムによって『オウエン著作史』の正・続篇また新訂をも加えて新たに編集を試みているが, 唯今のところ一応のしめくくりの成果をえた。

すなわち Robert Owen の著作番号としての「通し番号」は Nos. 1-611+1=612 である。

ただしその後の討究の結果削除すべきものは, 私の『著作史』の通し番号中, Nos. 29, 32, 383, 465, 549, 550, 551, 552, 562, 563, 564 の 11 種である。また私自身編集責任者であった「オウエン 70 年記念論文集」(『社会事業特輯』)には一旦記載しておきながら『著作史』正・続篇にはおとしているのは次の重要な著作である。

Mr. Owen's proposed Arrangements for the distressed Working Classes shown to be consistent with sound Principles of Political Economy: in Three Letters addressed to David Ricardo, Esq. M. P.……London, 1819.

この書については Library of Congress 本 [Political Pamphlet 36 (6)] を手にとって見て脱落と判定。訂正の必要を痛感した。それはタイトルページに

Presented to the Library of Congress/by Robert Owen の自署がある。

これで Owen の著書であることが明らかである。本文 pp. [3]-102 である。英国へまわって B. M. のカタログでも p. 598 にこの書は Appendix の中に入れてある。1027. i. 5 (5)。従って私の『著作史』通し番号 (35) の前に挿入する。

しかしオウエンの著作として, この「著作番号」の「通し番号」以外にも諸版本が若干あることすでに記したところであり, それらを調べて記載をより精密にすることはオウエンの著作の実態をより闡明にすることにもなる。これは私もすでに随分調べて来ているが, 今後も深入りを怠らず詮索をすべき局面でもある。御協力を得たい。

前述の「通し番号」に触れた諸版本として明らかなもの 106 種。「著作番号」に含み入れるとすれば, いまのところでも, 合計一応 700+106=806 種となる。しかしこれらの巨細はやはり今後五島茂著『ロバート・オウエン著作史』新訂版の本格化の作業を俟つほかはない。御諒恕を得たい点である。

PART II

Ch. I. Vision 第一
New Lanark
A New View of Society

Wales の美しい低い幾つもの丘陵にかこまれ、Severn の清流が貫流している Newtown—Montgomeryshire の Newtown の田舎町に Robert Owen は 1771 年 5 月 14 日に生まれた。7 人兄弟（うち 2 人は夭折）の下から 2 番目。小学校で早くも頭角をあらわし、7 才卒業と同時に助手兼助教師を命ぜられた。はじめ隣家の手伝いもしていたが、10 才で長兄のいるロンドンに出て、Stanford, London, Manchester と店員奉公を重ねた。王室御用達高級リンネル商、呉服卸小売商、薄利多売現金売の店でキャンブリック、アイリッシュ・リネン、レースの極上精巧な細糸織物に親しみ、やがて目利きになり将来役に立つことになった。

経営管理の徹底的訓練を受け、各種の顧客層との対応にも馴れさせられた。この店員奉公の中から、当時産業革命の進展とともに新たに生成されていった「発明家・企業者」の変型と Owen はなるに至った。その後の彼の経歴は (1) Jones との小合資組織、(2) 独立自営小企業者 (3) 当時すでに有名な Drinkwater 大工場支配人、(4) 独立企業者と合資組織と、各企業者パターンを Manchester でつぎつぎにこなし、結婚と結びついて (5) Scotland の New Lanark の大工場を買収して総支配人となった。しかも企業者としての生成とともに産業都市 Manchester 時代、同地の知的エリートとの接触・交流を深め、無学だった Owen の思想そのものの形成、とくに humanity のめざめに重大な影響をもたらすに至った。これら企業体験・知的練磨すべてが一体化して、New Lanark での開花となったのである。

この大工場は妻の父 David Dale (1739-1806 年) から買収・継承したもの。1700 人の工員をもつ水力稼働の有名な 4 紡績工場。ただそこは当時瀰漫していた病弊の悪環境が顕在していた。これに Owen 自身がアタックして、苦闘のすえ、Owen 一流のものに転生させえた。「社会改良者のメッカ」といわれ、世になりひびくに至ったのだ。しかし合資者の利潤第一主義、ないし Owen の Dale 遺産処理をめぐるトラブル（これは『自叙伝』には全然あらわれていない。詳細は私の『ロバート・オウエン』(1973 刊) を見られたい。）、ついに工場をめぐる競売も行われたが Owen が新合資者と共に勝利を収め、Owen のいわゆる「統治」が強くよみがえった。この競売をめぐる、Owen は二つの至重な著作を執筆公刊して世に問うた。第一が『ニュー・ラナアック施設についてのステートメント』[▲(7) A Statement regarding the New Lanark Establishment, 1812]、第二が“A New View of Society” 1813-14. の二つ。この文筆による爆弾が敵を打倒し去ったのである。後者こそ Owen の最初の主著である。彼をつきうごかしていたものは S. Pollard のいう「史上最初の新しい革命的な基本態度」を以て労働者たちを「人間」と見る humanity であり、これこそ New Lanark 工場の世界をつらぬく Owen の“vision 第一”なのであった。

A New View of Society

[内容]

Owen 最初の著書。性格形成論を中心とする社会にかんする新見解。この『社会にかんする新見解』が『性格形成論』というサブタイトルをもち、のちの1834年版以後、この方が書名となった所以は、第一エッセイに有名な性格形成のOwen テーゼがあるからだ。「人の性格は、一つの例外もなく、常に彼のために形成される。人は決して彼自身の性格をみずから形成しなかつた、いな形成し得ないものなのだ。」「最良の性格から最悪のもの、最も無知な性格から最も進んだものまでの、およそいかなる性格でも、確かな方法さえ講じれば、どんな社会に対しても、ひろく全世界にさえ、与え得られるものなのである。(しかも)その方法というのが、大部分は、世間の事に影響力をもっている人びとの支配下、統制下にあるものなのだ。」この性格形成における環境の重要視と環境改善による性格の改良の可能と、この二つの命題が本書で展開された。Owen をその原理の発見者とし、そのイニシアティヴのもと、New Lanark をモデルとして、政府ないし上流の人びとを刺戟して行動を開始させて、下層労働貧民階層の性格の改良、いな社会変革の可能を主張したのである。

本書が四篇のエッセイから成り、第一エッセイは以上の一般原理の宣明、第二から第四までがこの原理の実践、すなわち第二エッセイでは、それがNew Lanark ではないかに開花し、いかに現実に生かされているか、第三エッセイでは、この理論のもとに管理される「性格形成新学院」(‘New Institution’)における教育の詳細な報告。第四エッセイでは、原理の実行による社会的改良を政治権力に訴えて実践的・時論的な「すぐれて賢明な」政策提案を行なう。しかも同業企業家たちに対して、「生命なき機械」(‘inanimate machine’)よりも「生ける機械」(‘vital machine’)たる労働者へのより深い配慮を促し、それが教育により「合理的人間」となり、労働力の質の向上をもたらして、経営としても収益を生むと注意する企業者的アプローチ。「ここに humanity 重視の基本態度の輝きがあり、これこそOwenの「雇主の経済学」から「人間の幸福の経済学」創出」(都築忠七『イギリス社会主義思想史』編者序文、1986)の胎生へのいとぐちとも見うるものだ。

Owen の vision 第一の実態がここにあったと私は見る。vision 第一はOwen の New Lanark の世界で生きていたのである。

このOwen の *A New View* の主張の背景には当時拮抗していた機械破壊運動があった。これがOwen の肯定する「機械と蒸汽機関」=産業革命の生むプラスを破砕するおそれのあるのを憂慮して、*A New View* は秩序維持を労働者に勧奨する体制擁護態度(これは当然 Tory 党政権の喝采をえた。が、Owen にとってそれとはまもなく訣別の運命にあった。)を有したこと、さらに第三・第四

エッセイで彼の性格形成論に根本的に背反する国教会への反宗教言説を明らかにしたことも忘れてはならない。(この傾向がもっと早くからあることを指摘する研究者の論は相当多い。1817年彼の生涯の分岐点となった有名な宗教否定演説のさきぶれでもあった。)

この *A New View of Society* の出版がセンセーショナルな大波をおこしたことは周知の事実である。Owen の地位はめざましくすでに確立していた。何よりも当代の最大の企業者綿業王の一人。その工場は博愛主義的施設の随一、産業資本新経営の「天啓」(‘revelation’)として注視の的であった Owen が執筆した著作であったからだ。彼の理論の現実的力、実践の唯物論的基礎づけ、理論より実践の優位の主張も多くは未熟であり、「苗床」でもあった。しかし、時流の社会思想からは一頭ぬきんでていたのは明らかであり、humanity の vision はかがやくばかりであった。マルクス・エンゲルスのいわゆるユートピアン・ソシアリストたちで、オウエンのように企業体験をもつ者はいない。それも産業革命下のイギリス、マンチェスターや New Lanark での企業体験の敢闘の体験の生んだ原理・実践なのだ。ここにパイオニア・オウエンのぬきんでた強味があった。それはやがて socialist になる基盤でもあった。いばらの道はここからひらくのでもあるが、Owen はこの書の多大な反響のうちに利潤重視の partnership を競売によって打倒して開明的な新 partnership を獲得し、‘Robert Owen Company’として新生出発した。「この時期に私の公生涯は本当に始まったとっていい」と昂然たる表現が彼の『自叙伝』にある。

[出版年月についての若干の考証]

I. [問題の出発]

出版年月についての論議は、すでに Owen の生前からあった。1834年十一月 The New Moral World, Vol. I, No. 2, p.13 に前号所載の“Social Oracle Almanack” 抜萃記事へ正誤申込をした内に、Owen 自らいう。

“The Essays were published, the first and second in 1812, and the third and fourth early in 1813, and not in 1816.....The correct date of the publication of the first edition of the Essays is important on many accounts, and especially to prevent future disputes.”

Social Oracle Almanack には1816年とあったからだ。然るに、この Owen の一文に対して B.D. Cousins は十一月十二日付の書簡に“it seems the Essays *were* published in 1813 and 1816, but later editions: the first editions were published in 1812 and 1813.” (New Moral World. No. 3. p.24) と主張した。果していづれが真か。かかる時代においてはやくも此の如き意見の相違あるを知りえよう。私が再考察の所以である。Owen 自身の意見必ずしも論議の余地なきにはあらざるこ

と以下の考証を見られたい。

II. [資料]

今、私が集めえた資料のみをもってしても次の諸説がある。

1]. 1810年説の一見解

William Pickering 版4巻本 Selected Works of Robert Owen, 1993 の編集者 Gregory Claeys の第1巻は本書を1813-14としているが、その General Introduction, p. xxi に次のような注目すべき注がある。

“There is some evidence that Owen approached Liverpool as early as 1810 with a draft ‘Bill For the Formation of Character Among the Poor and Working Classes’ to establish a national school system (Liverpool Papers, British Library Add. MS. 38, 361, ff. 47-51)”

断片とはいえ刺戟的である。

従来のものは以下の如くである。

2]. 1812年説

(根拠)—— a). 1840年 London; B.D. Cousins 出版の Another ed. [Essays on the Formation of Character.] 即ち the latest ed., revised by the author, and printed with his authority. (大原研究所及び東北大図書館本)の冒頭([p.1])の “The Author to his Readers” に ‘These Essays were first published separately, in 1812, to sound the public on my “new view” of society.’

b). 1841年 Lectures on the Rational System of Society. 本文後の広告に, Essays on the Formation of Character; first published by Longman and Co. in 1812, and of which numerous Editions have been printed in England and in the United States of America. Present price 1s. とある。

c). Dialogue sur le système social par Robert Owen. Paris, 1848. および Deuxième dialogue sur le système social par Robert Owen. Paris, 1848 (ともに大阪市立大 Sombart 文庫本)の表紙裏の広告。Autres ouvrages de Robert Owen に New View of Society—Nouvelles vues sur la société ou essais sur la formation du caractère humain. 1812..... 1 fr. 25 c.

d). The New Moral World, No. 26, p.204. “Since the year 1812, I have stated in various publications.....”

e). The New Moral World, Vol. III, Third Series, No. 25, Dec. 18, 1841, p.194. “first published by Longman and Co. in 1812.”

- f). The Revolution in the Mind and Practice of the Human Race, 1849. (星島本, 現一橋大所蔵, 1850) 小形の裏表紙広告。"Essays on the Formation of Character, first published by Longman and Co. in 1812."
- g). Robert Owen's Journal, No. 1, Nov. 2, 1850. "What Mr. Owen did at New Lanark." p. 4. " 'Essays on the Formation of Character,' first published in 1812."
- h). ditto., p. 8. "Essays" in 1812.
- i). Letters to the Human Race on the Coming Universal Revolution, 1850. 表紙裏広告。"Essays on the Formation of Character first published by Longman and Co, in 1812."

3]. 1812-13年説

(根拠) —— a). 『自叙伝』の論述

"The two first were published in 1812, and the two last early in 1813." [Life of Robert Owen, Vol. I, 1857 ed. (関西学院大学柴田文庫本), p. 94].

"The two first essays were published at the end of this year, (1812) and the two last in the beginning of 1813" (ibid., p. 107).

- b). Outline of the Rational System of Society, Authorized edition, 1840. (星島本, 現一橋大所蔵, 1851), p. 16 に "Essays on the Formation of Characters; first published by Longman and Co. in 1812-13, and of which numerous Editions have been printed in England and in the United States of America. Price, 1 s."
- c). The New Moral World, Vol. VII, No. 69, New Series, p. 1098. "First edition. Published by Longman and other leading London publishers, in 1812, and 1813,"
- d). H. Simon: Robert Owen, Vorwort VI. „Ihr Erscheinen fällt in die Jahre 1812 und 1813.“

4]. 第一第二論を1813年刊とし、第三第四論をほぼ同時か、ないし1814年刊とする説。

(根拠) —— a). A New View of Society, Second Edition, London 1816, p. 15 註)。"The First Essay was written in 1812, and published early in 1813. The Second Essay was written and published at the end of 1813. The Third and Fourth Essays were written, and *printed* and circulated among the principal political, literary and religious characters in this country and on the continent, as well as among the governments of Europe, America, and British India. They were first printed for sale in July, 1816."

b). 『自叙伝』 Vol. I, Appendix B, p. 256 に次の断り書がある。

[The First Essay was written in 1812, and published early in 1813. The Second was written and published at the end of 1813. The Third and Fourth were written about the same time, and circulated among the principal political, literary, and religious characters in this country and on the Continent, as well as among the governments of

Europe, America, and British India. They were first printed for sale (Second Edition) in July 1816. The Third Edition was published in 1817, and the Fourth in 1818. These were in royal octavo. Many other Editions in various sizes have since been issued in England and in America. The name of the Author was given after the first publication of the First and Second Essays.] そして Copy of Original Title to the first Edition として 1813年の date あるものを reprint している。東大田尻文庫本はまさにこれである。

c). R. Dale Owen: *Threading My Way*, 1874, p.81. “It was in the year that my father, then in London and engaged in publishing the first two of his *Essays on the Formation of Character*,

d). *A Bibliography of Robert Owen* (The National Library of Wales, 2 ed, 1925, p. 1).

First Essay	1813-14
Second Essay	1813
Another Edition	1813
Third Essay	1814
Fourth Essay	1814
Second Edition of the complete work	1816

Ⅲ。[吟 味]

以上諸資料を査閲するに、先ず考えられるのは、Owen が出版前の手続を以て公表の日と見做し、それを以て出版の日としていたのではないかということだ。しかし私刷を以て出版と見なすことは問題であろう。出版という以上、Owen の所謂「輿論の厳正批判にかけられるために印刷にして出版」することになったその「出版」の日を問題とせねばなるまい。かくの如く見てどうであるか。果して Owen が幾度か書いた如き 1812年 Longman and Co. 版が存在するか否か。私はその Owen 自身の論述を頗る疑問とせざるを得ない。何となれば、

1). 1813年版すなわち『自叙伝』附録所載の“Original Title”の“copy”と同一の版が現存する事実、しかもそれが著者の名を By One of His Majesty’s Justices of Peace for the County of Lanark とし、爾後の版の如く Owen の名を出していないこと。

2). 1816年版は“Second Edition”と明記してあること。

3). Owen は 1812年版と幾度も書いている。(II 項, 1812年説を見よ)。だが注意せよ！ その執筆日附はいづれも 1835年以後のことだ。然るに、出版時日に最も接近した 1816年の論述 [第三説 (a) の如き] は明瞭に 1812年説と異なる。これこそ最も信憑するに足るではないか。

4). しかも更に注意せよ！ 再版, 三版, 四版がいづれも Longman and Co. 版なること。

5). 前述の出版エピソードは Owen の London 滞在を前提としてのみ成立する。だから、彼の論

文印刷出版の用での上京が1813年の始めであって、大体同年十一月頃まで滞在した¹と断定し得る以上、出版は其間のことと見られる。

以上の論拠によって私は Owen 自身の後年の叙述を誤謬なりとし、本書の出版は1813年以後と断ぜざるを得ない。第一エッセイをその年初、第二エッセイを年末とするのが合理的であろう。

しかしながら、第二の問題は第三・第四エッセイの出版時日だ、第一・第二エッセイを1813年刊としても。

如上第四説 (b) の材料により “About the same time に書かれ,” 同じく (a) の材料により “printed されて, circulate された” ことを知り得るが、印刷されて出版されたのが1813年か1814年かは不明である。

今われわれのもつ資料は Bibliography of Robert Owen 所載本と丸善旧蔵本と東大田尻文庫本 (=早稲田大学図書館本) の三つである。前二者は同一本らしい。

a). 丸善本は大きさいづれも8°. A New View of Society; or Essays on the Principle of the Formation of the Human Character, and the Application of Principle to Practice. なる一頁あり、1814年と明記した下に “not published” なる一語があり、第三論のタイトルページには Essay Third なる語なく、第四論のタイトルページには Essay Fourth なる語がある。第三論, III-XVI+53p. 第四論, III-VIII+61p. R. and A. Taylor 版, それぞれ頁つけを異にしている。疑問は “not published” なる語である。これは私的配布を意味するものと解すべきであろうか。

b). 然るに東大田尻文庫本は第三第四とも標題と motto のみに止まり, A New View of Society などの語なく、頁付は第三論から起って、第三第四論通頁である。明かに丸善本とも異なり、又1816年の第二版とも異なる。これもおそらく私的配布と見るのほかはない。

1816年の再版は全部通頁となっている。この点に関してもやはり再版の註を信じて私刷本は第一、第二エッセイのしばらく後、真の意味の出版は1816年と見るべきだと思う。

これを要するに、私の考証は結局再版 p.15 の註と『自叙伝』Vol. I, Appendix B, p.256 の断り書とを、諸材料を以て正当なりと根拠づけたに止まる。しかし本書が Owen 最初のしかも最も有名な主著であるのみならずその出版年月を Owen 自身も頻りに誤り、諸他の伝記本にも諸説あり、しかも従来存在した論証は、わが国においてはもちろん欧米においても全く不完全であった。以上私の考証もあながち徒勞ではないであろう。

¹ 『自叙伝,』邦譯 p. 89; Robert Dale Owen: *ibid.*, p. 81; Graham Wallas: *The Life of Francis Place*, 4 ed, p. 63; H. Simon: *ibid.*, S. 76-77.

[Bibliographical Description]

1]. 1813年版：— [合本]

A). Title (I) :—

⌘ *New View of Society*; /or, /ESSAYS/on the Principle of the/FORMATION OF THE HUMAN CHARACTER,/and the Application of the Principle/to/PRACTICE./[双柱罫]/
“Any character from the best to the worst, from the most ignorant to the most enlightened, may be given to any community, even to the world at large, by applying certain means; which are to a great extent at the command and under the/control, or easily made so, of those who possess the government of nations.”/[双柱罫]/By One of His Majesty’s Justices of Peace for/the County of Lanark./[飾罫]/London: /Printed for Cadell and Davies, Strand; /By Richard Taylor and Co., Printer’s Court, Shoe Lane./[短裏罫]/1813.

B). Collation (I) :—

大きさ 14cm.×22.7cm.¹ 頁数 iv+24; [p.1] タイトルページ (上掲); [p.2] blank page; pp. iii-iv. To William Wilberforce, Esq. M.P. (Robert Owen. New Lanark Mills); pp. [5] – 23. Essay First/on the Formation of Character/[裏罫]/ 本文. p.23 の後に短い罫の下に Richard Taylor and Co., Printers’ Court, Shoe-Lane, London とある; [p.24] blank.

A). Title (II) :—

⌘ *New View of Society*; /or, /Essays/on the Principle of the/Formation of the Human Character,/and/the application of the Principle /to/ Practice./ESSAY/SECOND./By ROBERT OWEN, OF NEW LANARK. / [飾罫] /London: /Printed for Cadell and Davies, Strand; and/Murray, Albemarle-Street; /By Richard and Arthur Taylor,/Printer’s Court, Shoe Lane/[短裏罫]/1813.

¹ 一橋大左右田文庫本は 13cm.×20.8cm. 早稲田大学本は 14.3cm.×22.8cm. である。製本の相違であらう。阪大本は uncut. 16.5cm×26cm:

B). Collation (II) :—

大きさ, 同前: 頁数 iv+40: [p. i] タイトルページ (上掲); [p. ii] blank page; pp. [iii]-vi. To THE BRITISH PUBLIC. (*THE AUTHOR.*) ; pp. 1-39. ESSAY SECOND./The Principle of the Former Essay continued, and applied in part to Practice./[裏罫]/ "It is not unreasonable to hope that *hostility* may *cease*, even where *perfect agreement cannot be established*. If we cannot *reconcile all opinions*, let us endeavour to unite all hearts." —Mr. Vansittart's Letter to the Rev. Dr. Herbert Marsh./[裏罫]/ 本文。 p. 39 の最後に短い裏罫の下に Printed by Richard & Arthur Tayl/or, Shoe Lane, London. とある ; [p. 40] blank page.

A). Title (III) :—

ESSAY THIRD./THE PRINCIPLES OF THE FORMER ESSAYS/APPLIED TO/⌘ Particular Situation./ [飾罫]/Truth must ultimately prevail over Error./[飾罫]。

B). Collation (III) :—

大きさ同前: 頁数 58p.; [p. 1] タイトルページ (前掲); [p. 2] 大部分 blank。ただ下に Printed by Richard and Arthur Taylor, Shoe-Lane, London の文字あり ; pp. 3-9. An Address to the Superintendent of Manufactories, and to those Individuals generally, who by given Employment to an aggregated Population, may easily adopt the Means to form the Sentiments and Manners of such Population./[裏罫]/Address の本文。 p. 9 最後に The Author とある ; pp. 10-58. Essay Third./ 本文。

A). Title (IV) :—

ESSAY FOURTH./The Principles of the Former Essays/applied to/Government./[飾罫]/It is beyond all comparison better to prevent than to punish crimes./A System of Government therefore which shall prevent ignorance,/ and consequently crime, will be infinitely superior to one, which, by/encouraging the first, creates a necessity for the last; and afterwards inflicts punishment on both./[飾罫]。

B). Collation (IV) : —

大きさ, 同前: 頁数 66p.; [p. 59] タイトルページ (上掲); [p. 60] blank page; pp. 61–66. To His Royal Highness the Prince Regent of the British Empire./[裏罫]/ 文。p. 66 最後に The Author とある; pp. [67]–124. Essay Fourth. p. 124 最後に The End. とあり, 下欄に [飾罫], その下に Printed by Richard and Arthur Taylor, Shoe Lane London.

2]. Second Edition: —

A). Title: —

A New View of Society: /or, ESSAYS/on/ THE FORMATION/of/ THE HUMAN CHARACTER/Preparatory to the Development of a Plan for gradually/ ameliorating the Condition of/Mankind./[飾罫]/BY ROBERT OWEN,/of New Lanark./[飾罫]/Second Edition./[飾罫]/London: /Printed for LONGMAN/HURST, REES, ORME, and BROWN, PATER-/NOSTER ROW; CADELL AND DAVIES, STRAND; J. HATCHARD, PICCA-/DILLY; MURRAY, ALBEMALE-STREET; CONSTABLE & CO., AND/OLIPHANT & CO., EDINBURGH; SMITH & SONS, AND BRASH/AND REID, GLASGOW; AND SOLD BY ALL THE BOOKSELLERS IN TOWN AND COUNTRY./The Profits of this edition will be given to the Association for the relief of the/Manufacturing and Labouring Poor/[短裏罫]/ 1816.

B). Collation: —

大きさ 25cm.×15.4cm.: 頁数 x+184 (実は 174); [p. i] タイトルページ (上掲); [p. ii] blank page, 下に Printed by R. and A. Taylor, Shoe Lane とある; pp. iii–viii. TO HIS ROYAL HIGHNESS THE PRINCE REGENT OF THE BRITISH EMPIRE (THE AUTHOR.); [p. ix]. 中タイトルページ。

ESSAY FIRST./ON/ *The Formation of Character.*/[飾罫]/ “Any general character, from the best to the worst, from the most ignorant/to the most enlightened, may be given to any community, even to the world/at large, by the application of proper means; which means are to a great ex-/tent at the command and under control of those who have influence in the affairs of men.”/[飾罫]; [p. x] blank page; pp. [11]–13. To the British Public./[裏罫]/ 文, (The Author); [p. 14] blank page; pp. 15–30 Essay First/ 本文。;

[p.31]. SECOND ESSAY./THE PRINCIPLES OF THE FORMER ESSAY/continued and applied in Part to Practice./[飾罫]/“It is not unreasonable to hope that *hostility may cease*, even where *perfect agreement cannot be established*. If we cannot *reconcile all opinions*, let us endeavour to *unite all hearts*.” Mr. VANSITTART’S LETTER TO THE REV. DR. HERBERT MARSH./[飾罫]; [p. 32] blank page; pp.33–68. Essay Second./[裏罫]/ 本文。;

[p.69] ESSAY THIRD./THE PRINCIPLES OF THE FORMER ESSAYS/APPLIED TO/
A Particular Situation: / [飾罫]/ Truth must ultimately prevail over Error./ [飾罫]; [p.70] blank page; pp.71–77. An Address. To the Superintendents of Manufactories, and to those Individuals generally, who by giving Employment/to an aggregated Population, may easily adopt the/Means to form the Sentiments and Manners of such/a Population. (The Author); pp.78–125. Essay Third./[裏罫]/ 本文; [p.126] blank page;

[p.127]. ESSAY FOURTH./THE PRINCIPLES OF THE FORMER ESSAYS/APPLIED TO/Government./[飾罫]/It is beyond all comparison better to prevent than to punish crimes./A System of Government therefore which shall prevent ignorance, and/ consequently crime, will be infinitely superior to one, which, by encouraging/the first, creates a necessity for the last, and afterwards inflicts punishment on both./[飾罫]; [p. 128] blank page; pp.129–184. Essay Fourth/[裏罫]。 / 本文. p.184,最後に The End. その下
表罫の下に Printed by Richard and Arthur Taylor, Shoe Lane, London.

3]. Third Edition: —

A). Title: —

A New View of Society: /or, ESSAYS/on/The Formation/of/The Human Character.....¹/By Robert Owen/[飾罫]/THIRD EDITION/[飾罫]/London: /Printed for Longman.....²/[短裏罫]/1817.

B). Collation: —

大きさ 15cm.×24cm.: 頁数 viii+184; [p. i] Title page; [p. ii] blank page; pp. iii-viii. Dedication; pp. [9]–13 Preface The Author.; [14] blank page; pp.15–184 本文。

¹ 再版に同じ。

² 再版に同じ。

4] Fourth Edition: —

A). Title: —

⌘ *New View of Society*: /or,/ *ESSAYS/on/**THE FORMATION*/of THE HUMAN CHARACTER/Preparatory to the Development of a Plan for/gradually ameliorating the Condition of /Mankind./[飾罫]/BY ROBERT OWEN./[飾罫]/Fourth Edition./[飾罫]/ London: Printed for Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, Pater-/noster Row; Cadell and Davies, Strand; J. Hatchard, Picca-/dilly; Murray, Albemarle Street: Constable and Co., and/Oliphant & Co., Edinburgh: Smith & Sons, and Brash/and Reid, Glasgow: and Sold by all booksellers./[短裏罫]/1818.

B). Collation: —

大きさ 24.8 cm.×15.4cm. ^{1,2} : 頁数 viii+p.176; [p. i] タイトルページ (上掲); [p. ii] blank page, 下端に表罫ありその下に Printed by R. and A. Taylor, Shoe Lane, London. とある; pp. iii-viii To/ His Royal Highness/The Prince Regent/of/the British Empire.; [p. 1] 中央に Essay First/on/the Formation of Character./[飾罫]/motto/[飾罫]; [p. 2] blank page; pp. [3]-5 To the British Public.; [p. 6] blank; pp. [7]-22 Essay First. 本文; [p. 23] 中央に Essay Second./The Principles of the Former Essay/continued, and applied in part to practice,/ [飾罫]/motto/[飾罫]; [p. 24] blank page; pp. [25]-60 Essay Second. 本文; [p. 61] 中央に Essay Third/The Principle of the Former Essays/applied to/A Particular situation./ [飾罫]/motto/[飾罫]; [p. 62] blank page; pp. [63]-69 An Address; [p. 70] blank page; pp. 71-118 Essay Third. 本文; [p. 117] 中央上寄りに Essay Fourth./The Principles of the Former Essays/applied to/ Government./ [飾罫]/ motto 二つ/[飾罫]; [p. 120] blank; pp. 121-176 Essay Fourth. 本文 (最後の p. 176 に The End) / 数行おき表罫あり, その下に Printed by R. and A. Taylor, Shoe-Lane, London とある。

¹ 23.5cm×15cm— 橋大学貴重書 B-80 (合冊本)

² 20.3cm×12.5cm— 橋大学貴重書 B-81 (単行本)

5]. 異本¹: —

A). Title: —

ESSAY/ON/THE FORMATION OF/THE/HUMAN CHARACTER./BY ROBERT OWEN./AND/PRINTED WITH HIS AUTHORITY./ BY /B. D. COUSINS, 18, DUKE-STREET, LINCOLN'S-INN-FIELDS, LONDON.

B). Collations: —

大きさ 17. 4cm.×10. 9cm.: 頁数 ii+85+iii; [p. i] Title page; [p. ii] blank page; [p. 1] The Author to His Readers (Robert Owen, London, 1840) ; [p. 2] blank page; pp. [3]–85 (pp.3–11, First Essay; pp.11–28, Second Essay; pp.29–32, An Address to the Superintendents of Manufactories,……; pp.32–57, Third Essay; pp.57–85, Fourth Essay); [pp. i–iii] 広告。

6]. [追] 異本としては他に, 1826, 1834, 1837 刊本がある. [所在] の項に詳述しておいた. 参照されたい.: —

7]. 翻訳: —

A). ドイツ訳: —

a). Title: —

Robert Owen: /Eine neue Auffassung von der/Gesellschaft./Vier Aufsätze/über die/Bildung des menschlichen Charakters, als Einleitung zu der Entwicklung eines Planes, die Lage der/Menschheit allmählich zu verbessern./[表紙]/Nach der 3. im Jahre 1817 in London erschienenen Ausgabe übersetzt und erklärt/von/Prof. Oswald Collmann./書店印の画/[表紙]/Leipzig. 900/Verlag von C. L. Hirschfeld./1900.

b). Collation: —

大きさ 14. 4cm.×22. 5cm.: 頁数 S. 111; S. 1–109 本文; S. 110–111 Anhang; S. 112 広告。

¹ The latest ed., revised by the author, and printed with his authority.

B). フランス訳: —

Nouvelles vues sur la société ou essais sur la formation du caractère human, 1812. 1fr. 25c. N. L. W. HX640-72. The Book of the New Moral World 佛訳 (Le livre du nouveau monde moral, 1847) のカバー裏表紙の広告による。

C). ロシア訳: —

Робертъ Овенъ. Обь образованіи челоѳческаго характера (Новый взглядъ на общество) Переводъ съ англійскаго. С.-Петербургъ, 2-е (полное) издание И. И. Билибина, 1881.

(所在) Library of Congress. U.S. A. HX/696/0918/1881

D). 日本訳: —

1) 『社会に関する新見解』(社会主義古典叢書第一冊)

大林宗嗣訳 東京 同人社刊 大正十五年 (pp.1-205).

2) 『新社会観』(岩波文庫) 楊井克巳訳 東京 昭和29年

3) 『社会にかんする新見解』(『世界の名著』 続8) 白井厚訳 東京 中央公論社刊 昭和50年。

[所在]

1813-14

(8) A New View of Society.

▲ [追] 米国 Library of Congress. Rare Bk Dept. Political Pamphlet 36 (7)

First Essay のみのもの。

Title Page 上欄の白に

Presented to the Library of Congress/by Robert Owen との明らかな自署あり。

[注意] Library of Congress の稀観本は Owen 自身が直接献呈したもので、いずれも出所が明確で、出版直後か、出版の度毎か、また Owen が渡米して首都を最初に訪れた時の献呈本と見ていい。最も重視すべきものである。大英博物館とはちがった観点からそれぞれ手を触れてみて感

動した。

▲ [追] 英国一

[i] B.M. 8406 gg. 15 (Privately printed)

(補: pp. 2-4)

[ii] G.S. L. A813 (3)

(大きさ) 23. 8cm. × 14. 5cm. 但し Pt. 2 は普通の初版。すなわち Robert Owen の署名のあるものである。

[iii] E. U. E. E. (注意。合冊本)

▲ [追 A] Second Essay のみのもの。

[i] B.M. 1027. i. 5. (1). (補 pp. 4-5)

[ii] N.L. S. Pamphlets 3/2836 の 8

[iii] Beinecke L. (Yale) NZ 2813 v

[1] 1813-4? 版: — (本 pp. 27-29) 日本 4+1 (補 p. 5)

[i] B.M. 8408. i. 10

[ii] G.S. L. A813 (2)

(大きさ) 23. 8cm. × 14. 7cm.

[iii] N.L. W. HX640-2-5

[iv] G.U. B04-1-18

(大きさ) 23. 3cm. × 14cm.

[v] Beinecke L. (Yale) NZ 2813 v.

[2] Second Edition: — (本 pp. 29-30) 日本 4 (補 p. 5)

[i] B.M. 1027. i. 5. (4.)

[注意] 大きさ。製本されて 20. 7cm. × 13. 1cm.

頁数・viii+ [2] +11-184

[ii] G.S. L. A. 816 (2)

(大きさ) 24. 5cm. × 15. 3cm.

[ii A] [Another copy] XIX. 16 K (2)

(大きさ) 24. 5cm. × 15cm.

[注意] Sir Robert Peel, Bar.¹ の book-plate 貼付。

また優良紙にて扉の前に With the Author's Compliment と書いた白紙が合綴されている。

[iii] N.L. W. HX640. 5

[iv] G.D. H. Cole Collection, Nuffield College Library, Oxford. SPEC. COLL. BB5.

もう一冊。(CH1177-1184)

[注] L. S. E. の Hutchinson Collection に、すなわち HX15. 116490 は The Welsh Bibliographical Society 刊行の例の N. L. W. 編の Bibliography of Robert Owen の初版 (1914 版) に Together with indication of accessible items in London Libraries として 1925 年当時学生であった Joseph J. H. Trask 氏の書入れをした copy がある。書入れ範囲は British Museum (これによると同館所蔵の分は当時 139 items とある。) Goldsmiths' Library, London School of Economics, G. D. H. Cole's Library, Bishopsgate Institute (Howell Collection), Guildhall of London であって、大体 A London Bibliography of Social Science: 1931ed. の参照範囲だが、それに後の何人かが、また Lit. & Phil. Institute, Newcastle on Tyne 所蔵の Owen 著作をマークしている。私は 1934 年 4 月これを L. S. E. で見出して、自分の分身を見る微笑を禁じえなかった。ここにある Cole の collection の記載を、その後一時私は使用したが、1969 年二月 Oxford で現実に Cole Collection を、同所の librarian の女性が私のために一括して提示 (そこには五島の『オウエン著作史』——私が G. D. H. Cole 教授に贈呈したもの——もちゃんと提示されていて感激した。) され、オウエン著作を採訪しえたので、爾後は私自身の手控を使用している。

[v] (新訂) (日本増加) 大阪大学附属図書館特別オウエン Collection.

[3] Third Edition: — (本 pp.30-31) 日本 4 (補 p.5)

[i] B.M. 960. h. 8.

[i A] [Another Copy] 29. b. 1.

[ii] G.S. L. A817 (3)

(大きさ) 21. 5cm. × 13. 3cm.

[iii] N.L. W. HX640—5

(大きさ) 19. 6cm. × 13cm.

[iv] R.O. M.M.

[v] (日本増) 大阪市立大学福田文庫

(注意) 私の『著作史』本文、多少活字の大きさなどの記載に相違がある。この版の活字の大きさは一切再版と同一。ただ p. vii が再版の時より、p. viii から一行多くせり出して来ていること。また 22 行目の System が such a system となっている位、p. 184 の imprint 再版と一字ちがうのと This Profits 以下全く省かれているのとの相違のみ。

▲ [追] [vi] Cambridge University Library.

Z. 23. 437. (4890-85) 3rd. 8vo. London. 1817.

▲ [追] [vii] First American Edition, from the third London Edition. New York. 1825 (補 pp.5-6)

Library of Congress HX 696. 09 1813f

[4] Fourth Edition: — (本 pp.31-32) 日本4

[i] G.S. L. A. 816. (2)

(大きさ) 24. 5cm. ×14. 3cm.

[i A] [Another copy] A. 10. 3.

(大きさ) 22. 4cm. ×14. 5cm.

(注意) R.Owen, On the formation of character として (2) New View of Society: Tracts relative to this subject. 1818 (3). An ADDRESS TO THE INHABITANTS of NEW LANARK. 4th ed. 1819. (4) Two Memorials 1818 と合綴す。見返しに A very valuable volume 其他の書込みあり。けだし Prof. Foxwell の筆である。

[ii] N.L. W. HX640—5

(大きさ) 22. 8cm. ×14. 6cm.

[iii] R.O. M.M.

[iv] E.U. D. o. 5. 18.

(大きさ) 22. 8cm. ×14. 6cm.

[v] (本邦増) 大阪市立大学福田文庫

▲ [追] [vi] First American Edition, from the Fourth London Edition. Cincinnati. 1825
New Harmony Library.

▲ [追] [vii] 同じもの—
Yale U.L. NX75/09/813 od.

▲ [追] [viii] 同じもの—
Library of Congress. HX. 696/09/1839
Cincinnati. M. 8. 5×5. 2 inch.

▲ [追] [ix] 同じもの—
Indiana U.L. (Bloomington) Spec. HX 696/-1.0931.

▲ [追] [x] Cambridge U.Lib. Acton. b. 48. 138
(07: 785)

4th ed. 26cm. London. 1818.

▲ [追] [xi] 異本 (1826年刊) : —

[i] B.M. 8403. dd. 2.

[ii] N.L. W. HX. 640-5

(大きさ) 17. 8cm. ×11. 3cm.

[注意] 補 p.7. Collation の項, 第3行に私は pp. [?] -viii (錯簡) と記した。今 N.L. W. 本によって正しくその錯簡であったことがわかった。すなわち N.L. W. 本は [iii] -v. To His

Royal Highness.....; [vi] blank page; pp. [vii]-viii. To the British Public とするからだ。

▲ [追] [xii] 異本 (1834年) :—

A) Title:—

ESSAYS/ON THE/FORMATION/OF THE/HUMAN CHARACTER./ここに鉛筆にて By Robert Owen という書込みあり。おそらくライブラリアンの書込み。/裏罫//LONDON/PUBLISHED BY W. STRANGE/PATERNOSTER-ROW; J. WATSON, WINDMILL STREET:/AND SOLD BY ALL BOOKSELLERS.//1834//タイトル・ページは四隅に樹葉を配して、飾罫でつまれ、下の左隅のラインの上に POLETT, PRINTERS. 右の隅のラインの上には 43, BEECH STREET とあり。

B) Collation:—

(大きさ) 20.2cm. × 28.2cm.

表紙 [p. 1] タイトルページ。(上掲). 表紙 [p. 2] blank page. 本文。

p. 1. 上に ESSAYS/ON/THE FORMATION OF THE HUMAN CHARATER/裏罫/“理想家庭と悪い家庭”(Crisis につかったのと同じ画あり。)//[片子持罫]//本文。2 columns に分かれ、左欄に ESSAY FIRST/ON THE FORMATION OF/CHARACTER/(5行)/[表罫]/P. 2.

[所在] Yale University Library.

[注意] この 1834 年版を 1969 年 Yale 大学を Baldwin 夫人と共に訪問し、実物を手にして一部のコピーの手続をいそぎ全体の記載を完うしなかった。Baldwin 夫人も今は亡い。残懐無限である。

▲ [追] [xiii] 異本 (1837年刊) :—

[i] B.M. 8307. bb. 9. (3.)

[ii] G.S. L. A. 837 (4)

(大きさ) 17.1cm. × 10.4cm.

[注意] 黄表紙を末尾に合綴。

[iii] N.L. W. HX646-5.

(大きさ) 16.8cm. × 10.5cm.

[v] G.U. BC. 23-67

(大きさ) 16.5cm. × 10.7cm.

[vi] G.D. H. Cole's Coll. (Oxford) SPEC. COLL. BB48 (1)

[vii] [本邦増] 慶應大学図書館 Q 14/58/1.

[5] 異本 (1840年刊) :—

[i] L. S. E. 61200. Jevons Coll. LXXIX, pp. 295-379.

(注意) Title page missing. [p. 1] は上下が少しづつ破れている。

(大きさ) 18cm. × 10. 4cm.

[ii] N.L. W. HX640-5

(大きさ) 18. 7cm. × 11. 2cm.

[iii] [Another Copy]

(大きさ) 18. 9cm. × 11. 2cm.

[iv] [本邦増] 大阪市立大学福田文庫

[v] 明治大学図書館

[6] 覆刻一

[i] Life of Robert Owen Written by Himself, Vol. 1. pp. [253]-332.

Appendix, B.

[7] 抜粋一

▲An Essay on Common Wealths, New York: Published by the New-York Society for Promoting Communities, Gray & Bunce, Printers, 1822. Part II. Extracts from Robert Owen's "NEW VIEW OF SOCIETY," pp. [44]-50.

なお同書最後の頁 [p. 64] に "Address to Robert Owen, the philanthropist." と題する詩がある。

[所在]

[i] G.S. L. XIX22 * 3. 大きさ 21. 8cm. × 13. 4cm. その見返しに Prof. Foxwell の筆になる "extremely rare. 1904" なる書込みがある。

[ii] Library of Congress HX654 E7

[8] 普及版一

[i] Everyman's Series. A New View of Society and Other Writings. Introduction by G. D. H. Cole, London, 1927.

[ii] Another edn. unchanged reprint from 1927 Everyman's edn. New York 1963.

[iii] Penguin Classics. Robert Owen, A New View of Society and Other Writings. Edited with an introduction by Gregory Claeys, London, 1991.

[iv] The Pickering Masters. Selected Works of Robert Owen, Edited by Gregory Claeys. 1993. Vol. 1. pp. 25-100.

[本邦に於ける所在]

a. 初版(1813-4年?)

- (i) 合本(上述)
 - a) 東京大学経済学部田尻文庫.
 - b) 一橋大学左右田文庫. 外池文庫(第一・第二エッセイのみの合本)
 - c) 早稲田大学図書館.
 - d) 放送大学附属図書館.
- (ii) 第一論文(1813)のみ. 一関西学院大学柴田文庫.

b. 第二版(1816)

- (i) 上記(i) } 豪華版と uncut の版: →大阪学院大学堀経夫文庫.
- (ii) 上記(ii) }
- (iii) uncut の版
 - a) 大阪市大銀行業務研究室.
 - b) 大阪大学附属図書館.
 - c) 一橋大学社会科学古典資料センター 貴 J561.
- (iv) 九州大学図書館.

c. 第三版(1817)

- a) 京都大学法学部.
- b) 関西学院大学柴田文庫.
- c) 一橋大学メンガー文庫.
- d) 名古屋大学図書館.(但し a facsimile reproduction)
- e) 大阪市立大学福田文庫

d. 第四版(1818)

- (i) 一橋大学社会科学古典資料センター 二冊あり.
一冊は合綴本(Tracts など) 貴 B 80 大型.
また一冊は 中型 貴 B 81
- (ii) 大阪市立大学ゾムバルト文庫. 福田文庫.
- (iii) 東京大学総合図書館.
- (iv) 岡山大学附属図書館.
- (v) 放送大学附属図書館.

e. 異本(1826)

- (i) 放送大学附属図書館.

f. 異本(1837)

- (i) 慶応義塾大学図書館.
- (ii) 放送大学附属図書館.

g. 異本(1840)

- (i) 大原社会問題研究所 .
- (ii) 東北大学図書館 .
- (iii) 東京經濟大学図書館 .
- (iv) 神戸大学図書館 .
- (v) 明治大学図書館 .
- (vi) 放送大学附属図書館 .
- (vii) 大阪市立大学福田文庫 .

Ch. II. Vision 第二

——'Plan'—Community—Co-operation——

Report to the County of Lanark

[成立]

1815年6月 Waterloo の Napoleon 敗北による戦勝国イギリスは、戦勝国にも拘らず、20年にわたるフランス革命、ナポレオン戦争のあとの激動に、社会的経済的に大きな打撃に打ちのめされることになった。朝野あげての戦後処理の狂奔も奏効せず、しばらく烈しい恐慌がイギリス全土をおそって1820年を迎え、窮乏・失業はすさまじく、それが労働者の叛乱までひきおこした。Owen の活動の中心地 Scotland の Lanark 州もその例を免かれ得ない。むしろ多い位であった。イギリス全土・スコットランドを通じ孤光のように光り輝いているのは Robert Owen の New Lanark 紡織工場のみであった。社会改革の楽園として知られた Owen のこの工場の繁栄持続の 'secret'。誰もがそれを知りたい。もちろん行政側は、それを見逃がすわけではない。Owen にすがって当面の対応とくに失業救済策の供与を訴えたのは当然すぎる。州庁に委員会が組織され、Owen に諮問して対応報告書の提出を促した。すがらむばかりといった方がいいかもしれぬ。Owen もそれに答えて、全力をつくして執筆、1820年5月1日 Lanark 州会の総会の為に印刷提出した24頁に及ぶ処方箋が有名な Report to the County of Lanark の原形態である。これは7人の委員の審査を経て、11月16日簡単な報告を發表された。Report そのものは鄭重に扱われ、印刷に付せられたのも委員会の申出によるものであったが、Report は委員会の予想をはるかに超えた驚くべきもので、社会変革を思わすものであった。委員会は Owen の Plan 全体への確定的見解を開示するのを避け、「より慎重な審議を要す」とし、ただ Spade cultivation のような個々の実験のより進んだ改良を望ましいとしている。さらにこの委員会に Sir James Stewart (Denham of Coltness) によって、Dalzell の Hamilton 卿からの申出が提案された。これは Owen の "plan" に基く一施設を促進建設する案で、自分の領地 (Dalzell) の一定地域を Owen の "plan" のように区切り、建物を作ろうというのであった。但しこれには「監獄の代り」という注文がついており、犯罪者をそこに収容して立派な市民に変えようという見透しで、その監督に Owen をという提言。これには Owen も即座に拒絶した。Report は全体としてそのまま不採用となった。この委員会の荷にあまる、印刷に付して公衆の討議にかけられるべきだと勧告した前書きをつけて返却された。

しかし、この Report が印刷に付せられて公刊されたことは重大な意味があった。事態は Lanark 一州への提案にとどまらず当時のイギリスの公のものとなり Owenism 躍進の緒となったからだ。1821年3月24日の The Economist 第9号, p.142に「最新刊」として紹介されている。

Report の反響は深いものをひきおこすが、まず Report にある "Plan" 実験へ直進する一団の人びとが、早くも翌年 Philanthropic Society を組織し、Motherwell の協同村を計画している。

そのみならず Report ははやくも海峡をこえてフランスにわたり、大センセーションをおこした。Académie が Owen に感謝決議をしたとは Owen『自叙伝』に記録されている。

Owen 自らがこの Report を至重した記述がやはり『自叙伝』2ヶ所に見える。今それを紹介しておこう。

「私は窮乏の諸原因を解明する報告書をつくった。そして改造され合理的に計画された社会によって、職の不足に対する恒久的の一救済策を有利に始めうる諸手段についての陳述をもそこに含ませた。そしてこの報告書においてはじめて私は、全人類のために有益に性格を形成し、人間性を統治するための、「一つの合理的社会制度を組織する科学」(the science of constructing a rational system of society) を説明した」(Selected Works of Robert Owen, Vol. 4. The Life of Robert Owen, p. 289. 『自叙伝』邦訳岩波文庫, p. 406)。「この報告書は、われわれ人類の幸福に必要な現実生活のあらゆる部門をふくむ全範囲にわたる完全な社会観の一つを与えるものとしておそらく空前の発表であった。それは社会に関する一科学の要綱が世界に与えられ、「この新しい組合せ」(this new combination) の各部分について理由が説明された最初のものである。かつかの空想家のフーリエ(imaginative Fourier) が、長い間の協同を決してつづけえない新旧の原理・実践をつきまぜて、実際の協同体社会(a practical community society)を作ろうという考えを心にえがいたのは、この報告書配布の後であった。(Vol. 4. The Life of Robert Owen, pp. 293-4. 邦訳岩波文庫, p. 413)」

[内容]

これは一應州庁への報告書形態そのままに公刊されたが、これはまさに Owen の vision I 以来6年間の知的蓄積の集大成であり、時代に対する彼の回答でもあった。ことに1817年の「工業労働貧民救済協会委員会」(カンタベリ大僧正サトン(Sutton)議長)に選ばれその委員会として提出の『貧困の原因と対策にかんする報告書』(Report on the Poor)の「一致と協同の村」(Village of Unity and Mutual Co-operation)以来、とくに批判・痛撃された Torrens たち経済学者への反批判、また時代の流行であった金本位制の復活をめぐる Attwood たちの提案への論争参加など、Owen 自身がもう一歩すすんでの論の蟬脱を目標としたものでもあった。漸く練達して来た Owen の知的遍歴中もっとも熟しきった尖頂の所産、彼の著作中最大の傑作と目されるものである。まさに Owen の vision 第二の光耀がここにあった。

後年彼の第二の劃期的著作と称された“The Book of the New Moral World”(1836-1844)は勿論そのものとして注目の価値がある力作だが、その清新な所論・構築・公刊時のミリューへの反響の社会的アピール度の強さなどをおもえばまさにそれは本書に比すべくもない。

本書の内容は次の三部から成る。

Part I. Introduction. (初版. pp.1-9)

Part II. Outlines of the Plan. (初版. pp.10-22)

Part III. Details of the Plan. (初版. pp.23-60)

Part I. ここで先づ Owen は自らの根本的見解を明かにする。すなわち Report を求められたのは州の現在の大衆失業の救済策である。しかし失業の真の解決は、社会進歩を阻んでいる障害の根

本的除去、結局社会制度の全改造以外にはあり得ない。

この半世紀イギリスは「産業革命」(まだこの 'Industrial Revolution' という言葉は出現してはいなかったが)による生産力の激進、しかも人口の大半を占める労働者階級は窮乏に苦しんでいる。それには新生産力に対応する施策がとられねばならぬのに、それが未だになかったからだ。ここに適切な新施設が必要なのだ。Owen は "new arrangement" という言葉を使ってこれを表現していることを注意したい。これが彼の "Plan" であり、協同村落案なのである。(初版. p.1)

さて Report は変革の必要なものとしてまず価値標準 (standard of value) の変革を提案する。従来の金銀による価値標準は、現在産業革命による激増の生産力の実際の富の代表の表現としてもはや対応不可能になったし、財貨の内在的価値を人為的価値に転化してしまった結果、「貨幣はあらゆる害悪の根」となった。それに代るものは「人間労働本位制」のみだと Owen は主張する。彼はこれを 'natural standard of human labour' と表現している。平均人間労働力を以て生産物の価値を確定し、交換価値標準とする。それによって人間労働ははじめて、自然的内在的価値を獲得する。科学の進歩とともに増大しつつというのだ。後年 (1832-34年) ロンドンでの Owen の「全国衡平労働交換所」('National Equitable Labour Exchange')「労働紙幣」(Labour note) の根基をいち早くつくったものである。

Parts II と III とは彼のいう 'Plan' すなわち Owen の描く協同体の見取図である。

1) member の数。

男女小児を含んで300人から2000人。しかし800人—1,200人がもつとも desirable である。それは "united labour, expenditure, and property, and equal privileges" の原則を立前としている。しかもここでは都市と田園の生活のあらゆる利便は十二分に利用しあうことになっている。

2) 土地の大きさ。

もちろんその主要産業により、男女小児の差もあろう。おのずから決まるが、この協同体は、原則として農業を主として、工業を従属さす。各人は労働を recreation にするので、各人に適当な耕作面積は半エーカーから1エーカー半であろう。従って、もしメンバーを1,200人とすれば、600-1800 acres となる。また工業地を考慮するとすれば、大体土地の全面積は150-3000 acres, 通常800-1,500 acres が適正規模である。

この土地、このメンバーの全生活を支配するものは協同原理である。全メンバーは、原則として、労働・消費・財産の一切を共同にし、特権をすべて平等にする。都市と田園の生活のあらゆる利便はことごとく利用しあう。

3) Spade cultivation.

労働は農業労働を主とすることは上述の通りであるが、耕作用具としては普通の「すき」(犁) (plough) の耕作の代わりに、4年前から Newcastle に近い Gateshead の Mr. Falla の実験成功にかんがみ「ふみぐわ」(鋤)耕作 (Spade cultivation) を採用する。これによると plough 耕法は心土を

ほぐさないで固めてしまう。Spade 耕作は人間労働力を多く必要とするが、より深耕をはたし、「すぐれた表土と良質の心土をつくる」という。それによって生じる農業労働力の雇用の増大は失業救済をも可能にすると共に農業生産力を高める。いわば一種の農業技術革命で、農業の昔からある因襲性を打破する契機をつくり、農業と他の新式産業との密なコンビに立ち、できる限り最新知識を利用して、農業全体の改善をはかる。

消費方面すなわち衣食住にかんする諸設備も一口に言えば協同的・集合的だ。「簡素に、住みよく、しかも経済的に」(初版・p.27)とある。炊事・倉庫・家の協同化から、教育の協同化殊に職業教育の必要を力説し、特色ある明るい衣服の採用も主張する。かような共同生活に基づく協同は全生活を支配して、自由競争より協同への主張となる。

4) 構成員の構成と統制。

協同体の統制運用は一定年齢にしたがって選ばれたメンバーを委員とする委員会の手による。一定期間がすぎればおのずから他の所定年齢者に改選される。運営は皆の関心事でもあり、たのしみでもある。全員参加のゆえに選挙運動騒ぎなど無くなる。

5) 生産物の処分と他の協同体との相互間の関係

さて、このような協同体が生産力の増加をもたらすのは当然であろう。Owen が熟知運営している工業に閑説するところが少なく、むしろ関係の浅い農業に傾斜しているのをいぶかしくおもうのを禁じえない。が、Spade 耕法による農業生産力増大への信頼は強かった。Spade 耕法は本来後退的といわれていたが、Owen はこれを科学的な言葉で正当化しているところがある。

各協同体はそれぞれ自給自足を原則とする。生産力は増加しおびたしい財貨の余剰が生まれるとみている。これらは各人の欲望のまま自由に使用させるから、富の個人的蓄積は必然的に消滅する。そこで、各協同体は、それぞれのメンバーの使用分をとりわけ、更に万一の場合に備えての穀倉や倉庫に入れる分はこれを取り除き、それでもなお剰余財貨があるときは、各協同体——それは一時に数多く造られるからこそ協同体的方式が存在するのであるが——の間の特殊生産物は相互に交換されることになる。交換は一切労働紙幣によって行われる。激増する生産力を代表しうるのが人間労働本位による労働紙幣以外にはない事はすでに述べた。

6) その他旧社会の国家などとの関係は Report 初版, pp.52-54 に言及されているがここでは触れない。

1820-21.

(39) Report to the County of Lanark.

(本 pp.96-109.)

[出版年月考証]

I. 二つの主張

(1) 1820年説:—

[1] 私刷—

1820年5月1日 County of Lanark の committee へ提出したもの。印刷に付して各委員に配布した。

[注意]

Pickering 版 Selected Works of Robert Owen, 1993, Vol. I, p.287 の Report to the County of Lanark, 1820. の脚注に 'An MS copy of pts. 2-3 is in the University of London Library (MS 692)' とある。これが County of Lanark へ Owen が提出したいわば私刷のそれか初版への MS かは不明であるが。

これはきわめて注目される脚注だ。その MS をすぐに見たくなる程だ。(すでに永井義雄教授は London 大学でその MS そのものを手にし検討済みであるが、教授にもそれは私刷のそれか初版印刷のための MS か判定しかねるようである。)

[2] 私刷以外の論拠

州廳提出のものを一応私刷と見るのが合理的であろう。それ以外 1820 年のオウエン自身の記述は次の如くである。

- i) Future of the Human Race, 1853. 1st ed. 本裏広告に本書の名をあげ、First printed in 1820. Price, 1s. とある。
- ii) 『自叙伝』Vol. I. 「この報告書が 1820 年にはじめて全世界に発表せられた時」(邦訳・岩波文庫本・p.407)
- iii) 『自叙伝』Vol. I.A. Appendix S 前扉のタイトル頁。May 1, 1810 とあるがこれは 1820 年の誤りであることが明かだ。

(2) 1821年説:—

I. 論拠—

- i) "Publ. on the 15th Jan., 1821" (Bibliography of Robert Owen, p.4). しかもこの版本は後述の 1821 年と明記する田尻文庫であって、かの An Explanation of the Cause of the Distress, 1823 ed., p.5 に本書のことにふれ、同頁 footnote で "Printed at the University Press, and published by Wardlaw and Cunninghame, Glasgow; Constable and Co., Bell

and Bradfute, Manners & Millers, and Waugh & Innes, Edinburgh; Longman and Co., Cadell and Davies, John Murry Hatchard & Son, London.” とある記述のものと照應している点から 1821 年説も生れよう。但し, Bibliography, p. 4 の如上の重要な “Pub …” の一句は田尻文庫本にはなく, その出所不明だ。

ii) その他の伝記, 例えば Podmore, Robert Owen: A Biography, 1923 p.658; Cole, *ibid.*, p.256 などはいずれも本年記。

II. 吟味.

本書は本文のほか, Appendix を収め, そのオアの Extract from the Minutes of the General Meeting of County of Lanark, held at Hamilton, on the 16th November, 1820 は, 十一月十六日の記事を含む点から本書の真の刊行はすくなくとも 1820 年の歳末より早くはないであろう。

しかしながら本報告書は, あきらかに, 1820 年五月一日の Lanark 州総会のために印刷 (どんな様式でも) 提出されたのである。

そして十一月の委員会でその審査報告を試みているのだ。こういう過程から Owen もこれを 1820 年としたのであろう。われわれもそれは認め得るが, それはあくまでも委員会に配布の私刷版と見るべきもので, 直の出版年月としては, 本書が一般に普及しうる印刷をし販売した時に確定しなければならない。

それは当時の Owen 主義者の運動週刊誌 The Economist, Vol. 1. No.9. March 24, 1821. p.142 に「最新刊」とある。それが出版年月日と見ていいであろうとはすでにふれたところである。

[所在]

1] 初版:—

[注意] The Economist, Vol. I, No. 9, 1821 年 3 月 24 日号, p.142 に「最新刊」と記されているのがこれであろう。

i) B.M. 8285. e. 19.

(大きさ) 20cm. ×25cm. 図版の大きさ 25.7cm. ×32.1cm.

(注意) Title page に . With Mr. Owen's Compliment. なる書入れあり。

i A) B.M. 8965. f. 16. (8)

ii) G.S. L. A. 20. 2.

(注意) 見返しに Gibson Craig's copy とあり, 又扉の右肩に With Mr. Hamilton's Compts. とある。けだしこの委員会の至要な一員であった Robert Hamilton, Sheriff Depute of Lanarkshire であろう。

(大きさ) 25.5cm. × 20.3cm. 図版の大きさ, 25.5cm. × 35.2cm. なお終りに The Economist の Prospectus (2ps) を合綴している。

iii) L. S. E. 61266.

iv) N. L. W. HX. 640. 23.

(注意) Presentation copy from (William) Falla. To Mr. M. C. Langlands. けだし Newcastle に近き Gateshead で 4年間 spade cultivation を実験した報告を合綴している Falla であろう。

v) R. O. M. M.

vi) E. U.

(大きさ) 24.8cm. × 19.8cm.

vii) G. U. B. G. 33-6. 3 (v)

(大きさ) 24cm. × 19.2cm.

viii) New Lanark Library.

ix) Yale U. Beinecke Lib. 28210

ixA) Yale U. Beinecke Lib. 2821, 0b

2] 初版 (Another copy) [B. M.] 8965. f. 16 (8).

大きさ 19.4cm. × 25.3cm. 図版の大きさ 25.4cm. × 33.3cm.

[注意] 『著作史』 p. 108 の初版の記述は下の如く精確に書かれねばならない。

REPORT/to the COUNTY OF LANARK,/of/A PLAN/for/Relieving Public Distress,/and/Removing Discontent,/by giving/Permanent, Productive Employment,/to the **POOR & WORKING CLASSES**;/under Arrangements/which will essentially improve their Character,/and ameliorate their Condition;diminish the expense of Production and Consumption,/and create Markets co-extensive with Production./ [裏野] /By ROBERT OWEN./ [裏野] /Glasgow:/Printed at the University Press,/for Wardlaw & Cunninghame, Glasgow;Constable & Co., Bell & Bradfute, Manners & Millers, and Waugh & Innes, Edinburgh; Longman & Co., Cadell & Davies, John Murray, and/Hatchard & Son, London./ [裏野] /1821.

なお図版には上に Ground Plan of the proposed arrangements described on the Land offered by Mr. Hamilton of Dalzell, 下に These Lands are advantageously situated about midway between Glasgow and Lanark and distant two miles from Hamilton. とある。

▲ 3] 異本。 [B.M.] 1137. e. 28. (2)

A). Title: —

大体初版と同じ、ただ初めが REPORT/to the COUNTY OF LANARK,..... となっているのと、
ⓃⓃⓃⓃⓃⓃ: /Published with the Author's Permission, by the Committee appointed/at a public
meeting held in the Equitable Labour Exchange,/Gray's Inn Road; for the purpose of taking
into/consideration the increasing distress of the/non-productive and industrious classes,/and
to devise efficient means for/their permanent relief./ [短裏野] /1832.

B). Collation: —

大きさ 12. 8cm. ×20. 5cm.: 頁数 75p.; [p. 1] title page; [p. 2] blank 中央下寄りに [裏野] /
Printed by Charles Vandrant,/4, Brewer Street, Golden Square./ [裏野] とある; [p. 3] Con-
tents.; [p. 4] blank; pp. [5] (目次に page 1 から始まる如くなすは誤り)–62 本文. 終りに ROBERT
OWEN とあり; p. 63 あとがき; p. 64 blank; pp. 65–75, Appendix, p. 75 終って欄外に Charles
Vandrant, Printer, 4, Brewer Street, Golden Square とある; p. 76, blank.

なお目次にある Appendix は初版と異なり、together with a Proposal 以下を省く。また最後の
Prospectus of a Plan は全然省かれている。

[注意]

これによっても明かな如く本書には再版三版があったのではなく、異本一つあったに止まる。
従って『著作史』才1巻 p. 108 の3, 4] の記述は全くあやまりであり、[本邦における所在] の項
の [三版] も [異本] と訂正さるべきである。

i) G. S. L. A. 832 (3)

(注意) 見返しに From Edward Truelove's Library 1900 とある。

(大きさ) 21. 3cm. ×13. 3cm.

ii) L. S. E. Pamphlet Coll. HX. 71.

(大きさ) 20. 6cm. ×13. 3cm. 但し p. 73 以下欠く。

iii) N. L. W. HX. 640. 23.

(大きさ) 20. 8cm. ×12. 5cm.

iv) Library, Workingman's Institute, New Harmony, No. 818 Miscellaneous. Owen. (とい
う合本)

v) Yale. NX75. 09. 841. b

4] 覆刻: —

a). The New-Harmony Gazette. Vol. I.

No. 35 (May 24, 1826) pp. [273]–275;

No. 36 (May 31.) pp. [281]–285;

No. 37 (June 7.) pp. [289]–291;

No. 38 (June 14.) pp. [297]–300;
No. 39 (June 21.) pp. [305]–307;
No. 40 (June 28.) pp. [313]–314;
No. 41 (July 5.) pp. [321]–322.

- b). New Moral World. Vol. XI, 1843, Nos. 38–43, 45, 46; Vol. XII. No. 1.
- c). The New Existence of Man upon the Earth, 1854. Pt. III. Appendix.
- d). A Supplementary Appendix to the First Volume of The Life of Robert Owen. Vol. I.
A. London, 1858, pp. 261–320.
大きさ 20.8cm. × 13.5cm.: 頁数 60p.; [p.1] タイトル Appendix S./ [裏罫] /Report to the
County of Lanark./by Robert Owen. May 1, 1810 (勿論 1820 の misprint) ; [p.2] blank
page; pp. 3–50 本文, 但し, 初版の “あとがき” は始めに来て本文標題と Part I の間に挿入さ
れ, The following Report と変えてある; pp. 51–54 Report to Committee; pp. 54–60 A
Communication.
- e). A New View of Society & Other Writings. By Robert Owen. With Introduction by G.
D. H. Cole. (Everyman's Library. No. 799.) 1927, pp. 245–298.
d). の再刻, 但し本文のみ。しかも paragraph のわけ方は全然原著を無視し, 全文が同一と
いうのみで, 注脱落, 用字変更等その他めっちゃくちゃに変改されていて不快なる程である。
- f). Report to the County of Lanark, New York, AMS Press, 1975. 73ps. Map. (1 fold) 24
cm. (Communal Societies in America) Reprint of the 1821 ed. Glasgow Wardlaw &
Cunninghame.
- g). Penguin Classics. Robert Owen, A New View of Society and Other Writings. Edited
with an introduction by Gregory Claeys, London, 1991, pp. 250–308.
- h). The Pickering Masters. Selected Works of Robert Owen. Edited by Gregory Claeys,
1993, Vol. 1, pp. 287–332.

5] 邦訳

- イ) 永井義雄・鈴木幹久共訳 『ラナーク州への報告』, 河出書房新社。「世界大思想全集」社
会・宗教・科学思想篇。第十巻。昭和 34 年刊。
- ロ) (改訂版) 永井・鈴木共訳 『ラナーク州への報告』 未来社。昭和 45 年刊。

[本邦における所在]

- 1) 初版:—
i) 東京大学経済学部 田尻文庫。

ii) 堀経夫博士旧蔵本。(大阪学院大学堀文庫)

[注意] 堀本は仮装。但し、見取図を欠く。終りに The Economist の広告を付す。

iii) 慶應義塾大学図書館。(最後の Prospectus を欠く)

iv) 東京経済大学図書館。

v) 日本大学経済学部図書館。(Prospectus もあり)

(大きさ) 25.3cm. × 20.2cm.

With Mr. Owen's Compliment in manuscript on the title page.

vi) 大阪市立大学図書館福田文庫。

vii) 放送大学附属図書館。

2) 初版 (Another copy): 一

i) 大阪大学附属図書館。CLP. 8503052987.

(大きさ) 26cm. × 21cm.

3) 異本 (London, 1832): 一

i) 神戸大学図書館 75ps. (大きさ) 12^o

ii) 京都大学図書館 (経済学部) Bücher 文庫。

iii) 大阪大学附属図書館。CLP. 8503082975.

iv) 永井義雄教授蔵本。(印刷所の所在が [p. 2] と p. 75 とにある。)

[反響・分析的批判]

Owen の思想体系は Report to the County of Lanark によって一応の完熟を遂げたといえる。それは協同体 (“Plan” = “Community”) を中心とする。これは協同原理によって貫徹される。Report はすでに見た如く, Part II, Part III をもって Community の outlines と details を詳述する。それらはもちろん大切だが、問題の至重性はむしろそれらの根本をなす Part I の論究だ。そこには明らかに Owen が資本家社会ではない対置社会を考え、社会変革の必然さを appeal している点だ。「協同」といい社会変革という。Owen は Co-operation—alternative—彼のことばでいえば the new arrangement—対置社会制を構築し提示しているのだ。“Co-operation” = “alternative” という重大なポイントを Owen は感得している。Owen においてはもちろん “alternative” という用語はまだ使用されていない。この用語は勿論現代の言葉であるからだ。しかしこれこそ Owen の vision そのものといえるのではないか。

“alternative” とは何か。都築忠七教授の説明を聞こう。こうある:—

「alternative は代替戦略思考のこと。二者択一・代替を意味する言葉だ。この言葉は政府と opposition というイギリスの政治的伝統だけでなく、イギリスの思想の一つのきわだった特徴と密接

に関連する。それは Dissent (異端) であり, Dissent は, alternative の用意のあるクリティークである。オルタナティブは, ユートピアのように天をかけめぐるものでも, イデオロギーのように地をはうものでもないが, 天と地をつなぐクリティークとして, その両者に似る。ユートピア社会主義者の実験的ユートピアは, その前走者といえるだろう。」

「より具体的には資本の戦略 (社会市場・市場主権の戦略) に対する労働の代替経済戦略が, 世界経済におけるイギリスの地位低下」

「Owen の経済思想をリカード経済学に対する alternative の経済学として位置づけることから, alternative としてのイギリス社会主義の歴史が始まる。協同の原理の上に様々な alternative を組み立てることが可能だが, Owen のそれがいちばん魅力的だと Sidney Pollerd はいう。」「『イギリス社会主義思想史』都築忠七「編者序文」(1986年)】

協同と alternative——これはいわば一つのもの二属性だ。この二属性合一の visionこそ, これから太い一つの運動肢を生み出した。それは太くふくらむで, いくつもの分肢を生んでくるものだ。

その運動分肢の第一が The Economist 刊行の上に立った『協同経済組合』(The Co-operative and Economical Society) であり, その The Economist へ Owen の執筆寄稿したのが『現下窮乏原因の一解明』(An Explanation of the Cause of the Distress) である。それがやがて William King の組合, William Thompson の Co-operative Congress, さらに Grand National Consolidated Trades Union の波濤とつぎ現代の協同組合運動の雛型を示し, ことし創立150年記念祭をする Rochdale Pioneers へと系譜する。その前ぶれであった。協同組合はやがて vision 第四の中でつぶさに検討したいので, その運動肢の一つとなる 'The Economist' の活動はそれにゆずってここにはふれない。

第二が the new arrangement の検証, 'Social System' の論策となる。

この Report to the County of Lanark のあとの二論策を Owen の精神的活動の精粹を成す三部作と見るのは私の年来の主張であるが, これはとりもなおさず, この1820年代が Owen の情念の高さをものがたり, 後代に遺すものを示しているとおもう。vision 第二の広域の世界をおもわすものといえようか。

** (40) An Explanation of the Cause of the Distress.

[内容]

本文は三節に分れる。

第一節は営利主義経済一般への相当精細な批判的分析と変革の必然的到來を論じる。

「社会の正当な目的は、人間の肉体的・道徳的・知的な性格の改良にある。しかも苦惱は最少に満足は最大にする為に、最も便利な欲望充足の仕方である」¹

しかるに社会は、現在の如き構成をもつ限り、如上の成果を産むとは考えられぬ。「幸福」を除外して「富の獲得」を主要目的とする社会だからだ。惨苦・窮乏・犯罪が漲るわけである。

欲望充足は長らく商業によって果されてきた。商業の基礎原理は(1)利潤、(2)微細分業、(3)個人主義的競争だ。

かかる制度・基礎原理は、或時代には必然であり、有用でもあった。だが産業革命はその時代を終らした。停顿・没落は何人にも転換・変革の必要を感じさせている。「利潤は、需要が供給と等しいか、供給より多い時にのみ獲られる。しかるに社会の真の利益には、供給が、つねに、需要より多いことを要するのだ。ここにこそ、個人的・闘争の利害に打勝つ、総体的・協同の利害のひろき・無数の利益が見出されるであろう。けだし、個人的な利害対立の制度下では、供給は需要より多くて利をあげる如きことは許されず、……かつ、科学の助けをえた生産力は殆んど無限だからである。」²

営利主義経済社会がうまくゆくのは、内外の戦争・悪疫・飢饉によってだけしかない。かかるあやまった社会制度、その生み出す有害なすさまじき諸結果を克服し救済するのは、一つの変革によってのみ可能だ。けだし唯ひろき経験によって生み出された見とおしに基づく科学的施設³——無限の生産をゆるし、その自由な交換を奨励する如き施設の建設——によってのみ可能なのである。その詳細は Report to the County に展開された処である。

第二節は変革及び変革後の実体をなす協同組合的制度を陳べる。資本主義的な商業との対抗形態としていかに活動するか、又その新制度の設備及び内部組織を展開する。

第一節に述べた如き変革は、新制度——そのメンバーに現存制度下より、より安く、より健康、より快く、生産物を創造し得させる施設——によって実現される。まず、最下層の人々から実行さして、一般に及ぶ。すなわちこの新施設の目的は、無産労働階級の性格・能力・状態改善にある。

この変革は、暫らくの間は、現存の商業制度と抗争する方法をとる。けだし新設備は質のいい・より安い労働を——従って労働生産物を——創造する。最も熟練した労働を最少経費で生み出し、同時に最も健康・最も愉快に労働を支持してゆくからだ。而して普通の商業主義を駆逐し市場を占領するに至る。工業商業農業其他日常生活万端への科学のひろく、すみやかな応用により、どしどしよきものが創られ粗悪財貨は淘汰されよう。

¹ 1823年版 p. 1.

² ibid, p.3.

³ ibid, pp. 4-5.

この変革の実体たる新施設は、労働階級のアパートメントだ。それは建築・暖房・通風・食事・衣服・訓育・保健に於て、また労働の使用に於て、正しく管理指導された科学を応用し、些事に至るまで、メンバーをよりよくすることに努める。

如上の変革は遂行容易に、実現手段は豊富に存在している。ただその実施に於て次の三方面は充分考慮されねばならぬ。(1) 成員の数——各人に最少の不便で最大の利益を与え得べき。(2) 構成原理。(3) 実際の諸設備の発見。かくて Owen はそれらを各々具体的に詳述し、経費の方面にまで及んで、精細な計算書を描いている。剰余ある時には積立てて人口増加に従って新らしき建物をつくることも示しながら。

第三節は新制度の運営、その利益の説明、並びに結論として社会理想を解明する。

如上の簡単な、しかし真に科学的な施設によって現在の営利主義社会制度は終焉を告げる。

一つの新制度の下では生産力は無限に増大する。メンバーにありあまる供給がなされる。更に剰余ある場合には他の同種の施設の剰余生産物と交換が行われる。貨幣によってでなく「労働」に換算して交換するのだ。貨幣取引は全く不要とされ（もっとも現存社会との取引には通常の交換手段を用いるが）、人間性への貨幣の悪影響は除かれる。

だがこの新施設も永久的のものではない。進歩の一段階であり、一時的なものである。けだし、これによって比較的短時間内にすべての人々はその欲するものは何でも使用しうるほどにまで供給は需要よりはるかに豊富だからだ。社会進歩は当然であろう。さて、この新施設のもたらす利益をここで挙げておこう。

1. 労働階級の性格へ及ぼす偉大な利益。

2. 一般的利益。

(イ) 生産量の公正な分配。

(ロ) 青年が、貧困・無智・悪行・悪性・同胞への憤怒・狭量の奴隷となることを実際に妨げる。

3. 特殊利益。

(イ) 幸福に必要なものの氾濫のなかにおく。

(ロ) 全地上は庭園の如くに耕され。

(ハ) 活動的に聡明にされ。

(ニ) 最も慈愛に充ち親切な感情をもつ。

(ホ) 体験により、有利・賢明な・よいとおもったことは何でもここでは採用する。

これを要するに、経済学徒の反対にかかわらず、新制度は「人間を墮落さし奴隷化し、不自然な束縛の下におく傾向をもつ」ものではない。それどころか、この制度は、秩序と幸福の社会制度の下に、人間に最大の自由と独立を与えようという考えで、歴史および事実の慎重な考究により、あらゆる部分が、目的的に注意深く計画されたものなのだ。公然たる自由の唯一の確乎たる基礎は、この新施設における如く、欲望の充分な充足——徳行——英知——その結果としての万人の幸福に見出されるべきである。(p. 12.)

[モーティーフ]

“Economist” 発刊によって Owen の道は無産階級へひらけた。資本主義の墓掘人との握手は、Owenism をどんどんそだてた。Report to the County of Lanark で基石をおかれ、Economist で端初をひらかれた無産階級 Owenism はその方向へのより瞭然たる Owen の主張を必要とした。Owen 自身も無産階級との接触を深める必要はいよいよつよかったのだ。本篇はかかる必要の反映であろう。

[批判]

本論考は眨たる小篇なるにかかわらず、種々の至要なる問題をはらむ点から注目される。

(第一) 協同組合原理の最初の論述たる意義において。

本論考は、資本家社会の批判的分析を鋭く試み、協同組織による利潤の撤廃を明快に主張した点で、従来の Owen の論述をまさに一步抜んでている。Beatrice Potter¹ は本書を重要な典拠として、Owen を「消費組合の精神的の父」となしたのだ。

思うに Owenism のイデオロギーたる「協同」は、Report to the County of Lanark において、個人主義への対立イデオロギーとして、価値深き展開を試みられ、協同体社会の指導原理たる所以を鮮明にした。だがそれが営利主義社会批判と結びつけられ、殊に商業への批判を実行されつつ、協同組合原理として説かれたのは本書に始まる。すなわち『協同組合の経済的諸原理』²がここで開陳されたのだ。

(第二) 分析の「方法」——素朴なる唯物史観的の主張。

彼はここで幾多の発展過程の分析を、手短かに述べる。その場合に彼は事象を全経済的社会的関連に於て——経済関係の光において——つかみとり、しかもその事象の発展——むしろ社会の「変革」——を、生産力の増大の視角から見透す。これは著しく注目さるべく、素朴でもあり、またやや雑炊的に経済史観に近い主張でもあるが、唯物史観的方法へ一步近づいたものとしてよかろう。

(第三) 読者層。

Economist に発表した為であろうか、問題が労働階級へ訴える形をとっている。Report to the County of Lanark では、よびかける相手が空漠だった。ところがここでは、労働階級へアピールし、労働階級の関心事たる諸問題を追跡している。これは充分考えぶかくとりあげられていいので

¹ The Co-operative Movement in Great Britain. Tenth imp. p.21. また Bernstein: Dokumente des Sozialismus. Bd. I. Heft. 9 も見よ。

² 本論考は、部分的には、より以前の論述の反覆だ。例えば、価値論、貨幣に代る労働券使用の主張、等。だが、興味あるは、これらの論述が協同組合の経済的原理の正確な把握によって補われ、完成された点である。(Vgl. H. Simon: Robert Owen, S. 158).

はないか。Report —— Economist (—— Explanation) とそのプロレタリアートへの下向はここに至大な画期を経験する。

[所在]

(初発表) The Economist [B.M.] P. P. 1097

(初版) [B.M.] 8285. aa. 2

(大きさ) 10. 7cm. × 17. 2cm.

(頁数) [ii]-12 p.; [p. i] title page; [p. ii] blank; pp. [1]-12 本文 図版1葉(裏白)

[Bibliographical Description]

▲ [1] 初発表.

A). Title: —

TO THE ECONOMIST./ An EXPLANATION of the CAUSE of the DISTRESS/ which pervades the Civilized Parts of the World,/ and of the Means whereby it may be Removed./ By Mr. Owen.

B). Collation: —

The Economist. Sept. 1, 1821. Vol. II, No. 32, pp.92-104 すなわち pp.92-97, SECTION THE FIRST.; pp.97-102, SECTION THE SECOND.; pp.102-104, SECTION THE THIRD. 最後に ROBERT OWEN の署名がある。

2]. 初版: —

A). Title: —

AN/EXPLANATION/of the/CAUSE OF THE DISTRESS/which pervades the/Civilized Parts of the World,/and of/the means whereby it may be removed./ [表罫] /BY ROBERT OWEN./ [表罫] /LONDON:/Printed by A. Applegath, Stamford-street,/for the British and Foreign Philanthropic Society./ [裏罫] /1823.

B). Collation: —

大きさ 10. 4cm. × 16. 7cm.: 頁数 12p.; [p. 1] タイトルページ [上掲]; [p. 2] blank page; pp. (1)-12. 本文 (p. 1—Explanation, &c. / [片子持罫] / 本文)。附録, 木版図一葉 (Community の)。

[邦訳]

五島茂訳:『現下窮乏原因の一解明』(『世界の名著』続8.「オウエン, サン・シモン, フーリエ」中央公論社。昭和50年2月刊。)

[本邦に於ける所在]

- 1] 初発表—Economist, No. 32 を見よ。
 - i) 日本大学経済学部。
- 2] 初版:—
 - i) 大原社会問題研究所。(附図を欠く)

* (41) The Social System. 1821 [1826-1827.]

[注]

五島「'Social System' (1821) 考——ロバート・オウエンの稀観論文について」(『ロバート・オウエン著作史』復刻版(東洋書館) 附録として配付。これはロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集』(1971) 発表のもの(pp.73-102。). 1936. 7. 25 執筆。補正 1971. 3.) の論考に詳細である。参照されたい。

[内容]

- 第1章。性格形成論。
- 第2章 第3章。旧社会制度批判(1)(2)。
- 第4章。新社会制度の理論。
- 第5章。新社会制度の実践。
- 第6章。原理再論。

旧社会制度=資本主義社会制度の存立基礎を分析して、その誤謬を指摘し、新社会制への必然的

移行を論じ、その移行の時期の既に来ていることを主張し、すすんで新社会制の態様をつまびらかに解明する。

本論文は一般のオウエン書目にはない。ハリスンの高名の著書にも然りである。発表形態は二重。1826年11月11日 New-Harmony が過去半年の業績と将来の展望の検討のために統師 Owen の講演をきいた。その中で Owen は「Social System に関する新著の第一章を朗読した。之が本論文の世にあらわれた最初の形態だった。第二章以下の全文は New-Harmony Gazette に1827年3月迄に11回にわたって分載された。彼の説明で6年前という。しかし1820年か1821年かは不明。だが1821年と見られる。その内容を検討すると Report to the County of Lanark 公表後、一般に旺盛して来た Community 設立の要求に応じて書いたと私は見る。ただ設立企画が幾変転して遂に実現を見なかったため発表の時期を失したのだ。“Social System” という意味内容は彼の主張する協同社会制度の解明。‘Social’ なる言葉は Co-operative を意味すること当時一般の通念でもあった。本書が協同社会制度を詳述したのち、その反対形態としての現存社会を ‘anti-social system’ と名づけているのでもわかる。従って本論文の題名を邦訳するなら「協同社会制度論」あるいは「新社会制度論」とすべきものである。更に本書は基礎理論を整備し、性格形成論の唯物的把握、また環境＝教育という最も基本的に重大な主張をして教育論を成形した。また経済学批判を展開、協同統制から協同主義経済学を提唱している。Plan の爛熟化をはかり「協同体憲法」(Constitution, Law and Regulation of A Community) をかかげた。

これを要するに本論文は、雑誌論文としてのみの発表ではあったが、その価値は刮目するに足る。殊に本論文が Report to the County of Lanark によって一応の理論的完成をみた Owen の思想体系が一転して協同社会制度の理論および実践の体系として、不完全さは多いが、一わたりは整備され、一つの実践的指導理論として New Harmony 実践へと旋回を遂げる重大時期の枢軸となったと私は見たい。

因みに言う。本論文の発表（1826年11月-1827年3月）の社会的実際的影響は皆無であった。New Harmony の没落は深刻化し、この発表期には、すでに打開不能に近かったからだ。かくして本論文の真の評価は、後代に委ねられざるをえなかったのだ。

[所在]

- i) 英国 B.M. P.P. 6392 n. B.M. は The New Harmony Gazette, Vol. I-III (Oct. 1, 1825-Oct. 22, 1828) の完本を所蔵)
- ii) 米国 a) Workingman's Institute, New Harmony, Library & Museum, Indiana.
b) Lily Library, Indiana University, Bloomington, Indiana.

[本邦における所在]

original text は無い。しかし近年覆刻版が出てその渴をいやしている。

[邦訳]

永井義雄訳『社会制度論』（『世界の名著』続8。「オウエン、サン・シモン、フーリエ」pp.213-282.
中央公論社, 昭和50年2月刊。）

一つのとじめに

Owen the paradox. paradox Owen. Owen の著作文献はその証左だ。その上に Vision をのせてきた。いくつもいくつも。これからいくつのせようというのか？ Owen の87年の生涯, その幾つもの場面に Vision を描いてみる。いろいろのものが見えてくるようだ。それは結構たのしい。Owen も Vision も生きているからだ。これは私自身 visionary であるからかも知れぬ。

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 31*

発行所 東京都国立市中2-1
一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1994年3月31日

印刷所 東京都八王子市石川町2951-9
三省堂印刷株式会社

